

楓の手づくり¹⁾

——国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の総合誌——

阿部 安成



手書き手づくり 国立ハンセン病資料館図書室には、国立療養所邑久光明園（以下療養所名の表記では「国立療養所」を省略）で発行された逐次刊行物『楓』の複写製本合本が配架されている。そのうちの1冊の背表紙には、「1947/VOL.1/1948/VOL.2/No.1-3」との印字がみえる。開くとそこには手書きの冊子の複写が綴じられていた。

癩そしてハンセン病をめぐる療養所内で編集したり発行したりされていた逐次刊行物に、手書きの文字を謄写版で刷った紙面があることは知られている。たとえば、わたしが調査と研究のフィールドとしている大島青松園では、自治組織の機関紙『報知大島』とキリスト教霊交会の機関紙『霊交』の手書き謄写版刷りの号が残っている²⁾。ただし後者の、手書

¹⁾ 本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト「療養所環境を交ぜる」の成果であり、2015年度滋賀大学経済学部ワークショップ ReD [Rethinking excessively for Documentation] の活動の一環でもある。

²⁾ 所在がわかっている『報知大島』と『霊交』のすべての号は、阿部安成監修、解説『報知大島』リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ1(近現代資料刊行会、2012年)、

き手作業で8部または10部つくったというその初期の号はいまだに所在がわかっていない。この大島では、1940年代の戦時下に、物資節約にかかわって逐次刊行物の発行が停止されたそのあとに、手書き手づくり1部かぎりの「廻覧雑誌」がつくられていた。その名を「青松」という³⁾。わたしはこれまで訪ねた10の国立療養所での調査をふまえて、こうした手書き手づくりの少数向け媒体は、大島青松園の『青松』だけだとおもっていた。それがもう1つあったのだった。

手書き手づくりの『楓』が綴じられたさきの合本製本のつぎの巻はというと、その背表紙の印字をあげると、「1948/VOL.2/NO.4-10」「1949/VOL.3 /含む/開園十周年/記念号」と印字された2冊がある（さきの1冊にくわえて以下順に第1分冊、第2分冊、第3分冊、とする）⁴⁾。第1分冊には「解体して、第1巻と第2巻に分ける」と、第2分冊には「1、2巻の2と一緒にする」と手書きで記された附箋が貼ってある。また前者に綴じられた「欠号表示票」によると、同誌第1巻第1号が欠号となる。

第1分冊には、第1巻第2号（1947年3月15日）、第1巻第3号（1947年6月10日）、第1巻第4号（1947年8月29日）、第1巻第5号（1947年10月15日）、第1巻第6号（1947年12月5日）、第2巻第1号（1948年1月30日）、第2巻第2号（1948年3月25日）、第2巻第3号（1948年4月25日）の8号分が綴じられている。

第2分冊には謄写版刷りとなった、第2巻第4号（1948年6月10日）、第2巻第5号（1948年7月10日）、第2巻第6号（1948年8月15日）、第2巻第7号（1948年9月5日）、第2巻第8号（1948年10月10日）、第2巻第9号（1948年11月5日）、第2巻第10号（1948年12月10日）の7号分が綴じられている。

同『靈交』同シリーズ3（近現代資料刊行会、2014年）を参照。

³⁾ 前注に記したシリーズの4として『青松』を2016年に刊行予定。手書き手づくりの『青松』については、阿部安成ほか「後続への意志—国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.116、2009年9月、阿部安成「手づくりで始まる—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて」同前 No.243、2015年12月、同「手づくりで詠む—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて」同前 No.244、2016年1月、を参照。

⁴⁾ 同誌第2分冊と第3分冊については、阿部安成「楓の印刷—国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の文芸誌」同前 No.246、2016年2月、を参照。

第3分冊には活版印刷となった、「開園十周年記念号」（1948年12月25日）、「一・二月合併号」（1949年3月1日）、第3巻第2号「三・四月号」（1949年5月1日）、第3巻第3号「五・六月号」（1949年7月1日）、第3巻第4号「癩療養所開設四十周年記念号」（1949年9月1日）、第3巻第5号「九・拾月合併号」、「十一・十二月号」（1949年12月20日）の6号分が綴じられている。

本稿では、この第1分冊に綴じられた、手書き手づくりの『楓』をとりあげることで、まずはその始まりのようすを当事者の史誌に確かめておこう。邑久光明園入園者自治会を著者兼発行者とする『風と海のなか—邑久光明園入園者八十年の歩み』（1989年）は、「『楓』復刊と文芸団体」と題した項目を設けて、そこでつぎのとおり説いている。

終戦の翌年二十一年に発足した文芸会は、その作品発表の場として「楓」復刊を企画した。しかし、欠乏の時代とあって機関誌「楓」の発行は無理であった。そこで考えついたのが手書きによる「楓」発行であった。／文芸会に所属する詩謡会、短歌会、俳句会の幹部が編集同人となり、文芸誌「楓」として昭和二十二年一月一日第一号を発行した。四百字詰の原稿用紙をペン字で埋め、厚手の表紙で綴じ合わせた、まさに手作りの冊子で頁数は四〇頁程度、発行部数は一部で、希望者二〇余名に回覧する所から出発した。この記録からすると、手書き手づくりの『楓』の創刊号は第1巻第1号として確かに発行され、しかし、それが国立ハンセン病資料館図書室にも、そこに複製を提供した国立療養所邑久光明園にも、その最初の号がなかったこととなる⁵⁾。

また、長島愛生園神谷書庫にある「長島愛生園「神谷書庫」収蔵図書一覧」と題された活版刷り小冊子には、『楓』の最初の「休刊」期間が「昭和19年8月～昭和21年12月まで」と記され、かつ、「昭和22年1. 2. 3. 4号」が「欠本」と示されている。すると同誌の休刊は1947年には解消され、その年に第1号が発行されたものの、神谷書庫にはそれが無いということとなろうか。

⁵⁾ 別稿（阿部安成「復刊のときへ—ハンセン病をめぐる国立療養所における総合誌と〈戦後〉」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.242、2015年11月）で邑久光明園の提示した情報ではこの第1巻第1号は発行されなかったと記したが後述のとおり実際に発行されたとしてよいと考える。

なお、1944年7月5日に発行された第9巻第7号をもって、その刊行を「暫時休刊する事」（同誌同号「編輯後記」）となった『楓』の「復刊」は⁶⁾、同誌上においても、さきの史誌『風と海のなか』が記したところでも、1949年発行活版印刷の「一・二月合併号」となっている。その前年末発行の活版刷り「開園十周年記念号」（表表紙に「楓」の題字あり）も、1948年6月から12月までに謄写版で刷られた『楓』も、そして手書き手づくりのそれも「復刊」とはみなされていないのである。

「刊」の字義はけずる、刻む、彫る、であり、そこから、「木を彫って書物を出版する意」（『新漢語林』）をもったという。だから手書き手づくりを「刊」とはいわないとの判断があるかもしれないが、木版から転じて謄写版であれタイプや活字を用いた印刷であれ、それらを一般に「刊」というとき、しかし邑久光明園の『楓』にかぎっては、謄写版刷りの号も活版印刷の記念号も「復刊」とはみなされなかったのである。

第1巻第2号 表表紙には、手書きの「楓」のひと文字と、「2・3月合併号」の文字が縦に記されている。本と葡萄とグラス、窓のむこうに月と星を描いた絵がある（おそらく後筆の「22年」もみえる）。その1枚をめくると、「コクヨの165規格A4」「十行 廿字詰」と印字された400字詰原稿用紙が半分折りの本体となる。そこにはまず扉があり、その裏は目次、ついでページノンプルが1から35までふられた本文、そして奥付となる。

扉ページには多くの情報が記されている——「昭和廿二年三月十五日発行」「綜合雑誌／楓／第壹巻第貳号／式參月合併号」「楓」編集部編／文芸会発行」「S.TAro」「22. 3. 15」、そして花瓶に生けられた花の絵。本文にもところどころに、楓や蠟燭、インク瓶からこぼれるインクなど手書きの挿絵がある。

目次は本号掲載稿が、医務課長稲葉俊雄「一、再び救癩と防癩に就いて」、園長神宮良一「一、癩病に関するニュースの一、二」、吉永亨「一、詩／一、追憶／二、陸近く」、津島久雄「一、感想文 生きる」、天羽龍馬「一、〃 触れる」、「一、短歌 飯崎吐詩朗選」、「一、俳句 編輯同人集」、「一、〃 雑詠 弦月選」、静岡光子「一、山茶花によせて」、編集部同人

⁶⁾『楓』の発行については、阿部安成「復刊のときへーハンセン病をめぐる国立療養所における総合誌と〈戦後〉」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.242、2015年11月、を参照。

「後記」であると告げ、また「表紙及ビカツト」が千島染太郎の手によると教えている。表表紙のサインは彼のものだった。目次の囲み罫にも笹の葉様の模様が描かれ、染太郎のくふうがあらわれている。

この『楓』は、「総合雑誌」であることをみずから明確に掲げ、執筆者は療養者にかぎらないという方針のもとに編集されていることがうかがえる。

巻頭におかれた稿「再び救癩と防癩について」をみよう。執筆者は医務課長の稲葉俊雄。表題に見える「再び」の語は、「かつて『楓』誌上、私は同じ題目に就いて小文を書いたことがあつた」からという。「その当時は我が国も戦禍の中にあつたが「救癩即防癩」「防癩即救癩」でなければならないといふ考へは、今も昔も変りはないのである」と記し始めた稲葉は、「救癩といふと癩患者を救ふといふことであつて甚だ気持のよいあたゝかいひゞきを持つてゐるのに対して、防癩即ち癩予防—癩病を予防するといふことは、どことなく冷やかなひゞきを持つのである」と述べ、「前者が癩患者自身をみつめてゐるのに反して、後者は癩患者以外の一般健康人を対象としてゐるように思われる」と指摘する。

稲葉はつづけて、「明治四十一年に癩予防法ができてからしばらくは、浮浪癩の隔離収容といふこと即ち防癩に力が注がれて来た」、それが「昭和に入つて皇太后様の御声がよりで、救癩といふ旗印は漸次明かになり、浮浪癩の救護や隔離はもちろん、家庭癩の救済によつて、同時に社会の健康人から癩の蔓延を予防するといふことも行われて来た」とその展開を説く。なお、彼が「防癩」の始まりととらえた法律は、正確には、1907（明治40）年公布、1909（明治42）年施行の法律第11号「癩予防二関スル件」となる。「癩予防法」という名称の法律は1931年の公布施行となる。

癩についての基本法にはつねに「予防」の語がついていた。癩対策の展開を稲葉は、一貫した「予防」ととらえてあらわすのではなく、「防癩」から「救癩」への転換とみせたのである。しかしそれでは、彼自身が、戦時下においても現時においてもかわらないという「救癩即防癩」「防癩即救癩」の主張に反してしまわないのか。「防癩」から「救癩」への転換とみえてしまう彼の記述は、おそらく、貞明皇太后の事績を顕彰しそれを強調しようとする意思がもたらしたのだろう。「昭和に入つて」からも「浮浪癩の救護や隔離はもちろ

ん」とも記したのだから「救癩」＝「防癩」といい得るということなのだろう。

では、両語の響きをめぐる温かさと冷やかさはどうなるか——「癩予防に急進すれば、癩患者自体の救済といふこと即ち救癩は第二義的に取扱はれ、感情の面に於て暖かみを欠く嫌ひがあらはになつてくる」と、ここで「癩予防」と「救癩」とが相容れないばあいもあると示し、しかし「癩問題は今や「浮浪癩」の時代から「家庭癩」の時代に移つてゐると言わねばならない。従つて癩療養所は暖い癩患者の抱擁の場所でなくてはならないし、隔離即ち癩予防もこの線に沿つて行はれるべきものであると信ずる」との胸中を明かすにいたる。

稲葉は、かつて当初の予防法が対象としていた「浮浪癩」よりも「家庭癩」にこそ「暖かさが必要で、「療養所が愛の郷土であれば、患者は喜んで集つてくるし、隔離といふことは自から之についてしらずしらずの間に行はれて行くのである。こう考へて来ると、光明の園、楽土建設といふことがどこからみても最も大切なことであり、之がいはいゆる満床運動の基礎をなすことを疑はない」との確信をもみせたのである。

この稲葉の議論で考えるべきところは、癩の救済とは「癩患者自身を見つめてゐる」のに対して、予防とは「癩患者以外の一般健康人を対象としてゐる」「社会の健康人から癩の蔓延を予防する」ことにほかならないと唱えている点となる。

稲葉は療養所の医療事務をつかさどる立場から、癩をめぐる予防と隔離の核心を的確に突いていた。癩を予め防ぐとは、すでに病に罹ってしまったものではなく、いまだ罹患していないものを対象とし、そのものたちにこれからさき病が伝染らないようにし、「健康人」が健康のままでいられるようにするとの謂なのである。ただし、その予防を重点化するからといって、「癩患者自身を見つめてゐる」「救癩」をおこなわないというのではない。罹患者を隔離せざるを得ないのだが、隔離先となる療養所を「愛の郷土」としてつくりあげること、発症したものがそこに入ることを厭わず嫌わずに、はっきりと意識せずとも自然と療養所で暮らすようになるを目論んでいたのである。

わたしはこうした仕組みの進行、達成、完成こそが絶対隔離の語でいいあらわせると考えている。それはたんに、全発症者を終生にわたって完璧に閉じこめてしまうということ

と説くだけでは足りないのだ。そしておおよそ、この仕組みが稼働したといえるともわたしは考えるものである。だが稲葉は、いまだ充分ではないとの憤懣を述べる。これまで「楽土建設の為に職員も患者も努力して来た」それを「尚一層の誠意と熱意を以て、凡ゆる障害を突破して」「民主的人道的な方向に邁進して行く必要がある」とうたえる彼の「理想」は、いったい、なにが、どうなったときに、実現したと確かめられるのだろうか。「愛の郷土」「楽土建設」「民主的人道的な方向」の連結のさせ方が、療養所運営の要諦となるはずである。「現下敗戦後」という時局ゆえの特別な昂揚があったのだろうか、1947年に療養者がいうところの「役所」の人間がこうした宣言をしたことを覚えておこう。

稲葉の原稿は最後に3行の余白があり、そこには、「^{パン}麴を喰えど^{ムギ}麦の形を知らず／…西洋俚言…」の文字と、傾けたインク瓶から落ちるインクひと筋と下にひろがるインクが描かれている。

つぎの稿「癩病に関するニュースの一、二」は、邑久光明園園長の執筆。またしても「役所」の人間、しかもその長の登壇となる。「(一) 世界中にレプラ患者は何人居るか?」「(二) 癩患者の希望」と二部構成をとってはいるものの4ページ(200字/1ページ)と2行のわずかな紙幅で園長は、新聞報道によって「米国唯一の癩療養所カルビル」(Carville)のようすを紹介するなかで「プロミン」をとりあげ、その「注射によつて幾分でも消退せしめることが出来ると、日本の癩一五、〇〇〇のものにも一大福音だと思ふ」と記して稿を結んだ。

吉永亨の「追憶」と「陸近く」と題された詩は、前者が「故郷」を離れたときの「淋しさ」をおもい、「船のデツキにもたれ」る「私の心は暗いのです」とうたう後者は故郷を訪うときの困惑する気持ちをあらわしたのだろうか。この稿の余白にも、山並みと草を描いたみごとな挿絵がある。そこにはまた、「新人の詩の投稿を歓迎します! / 原よし志氏選 / 編集部」との添え書きがある。

「感想文 生きる」を寄せた津島久雄は、『『楓』創刊号を手にしてまづしい感想をつづりこの『楓』がうんと良いものとなる様、祈』った。彼が題目にあげた「生きる」とは、「人間の一番大切な事」で、それは「肉体を言うと同時にそれ以上の霊の生きる事を言う」

と説き、かつ、『楓』は永久に癩院は獣の眠りをむさぼりつづけねばならないのか……なる癩院に生かすいのちを与えよ、ゆたかにかつ豊かにおくれ〔中略——引用者による。以下同〕いのちよ、一ぱいあふるるいのちよ。^{フエニックス}不死鳥よ、我が『楓』よりはばたけ」と願った。

目次にはない、千島染太郎の「小さな唇に唇をよせる思索」と題された稿が、津島の稿の余白 6 行に記されている——「話題を豊かに持つてゐる。そしてその話題は明るくて新しい。大きな声で繰り返かえしても小さな声で繰り返かえしても、雑音のない音楽を聴くような純なりズムのある言葉を持つてゐる。此の美しい雄弁家。それは児童である」との子どもたちへの着目があらわされている。

もう 1 つの「感想文」は天羽龍馬の「触れる」である。ここでは、かかわる、といった意味でその語がとりあげられ、「民主主義」「自由主義」の時代となり、「封建的な時代」の「触れん主義が我等を有形無形に因循姑息にしてゐた」ところとは決別しようと呼びかけられている。

ついで、飯崎吐詩朗の選となる「短歌」。まずは、利根俊夫の「苦しき日の思出」。ここには、「海陸空兵に聯合國のために封鎖されニューギニアの密林地帯に孤立残存しありたれば食糧もつきはてゝ」との詞書がある。その 7 首のうち 4 首に「死にゝけり」「死にゝき」「死にゝけり」「死にゆく」の語があり、ほかの 3 首は「今日の命」「食す」「二口に満たざる程の飯」「食ひし」の語がみえる。ほかに「椰子の実」と題された 4 首と、「再び園に職を奉して」の題のもと詠まれた 1 首「死ぬべかりし命なりしぞ今日よりは癩病む人と共にあらなむ」がある。

上森香穂子は 6 首を寄せ、そこで「善通寺の塔」「讃岐路」「阿波の山々越え」「土佐の海」「焼あとの街高知」をうたう。これは想像か。永井静夫は 4 首に「雪」の題をつけ（「こそとだに音なく雪は降り積めり葬儀はじまる笛きこえ来つ」など）、「全生園より実況放送を聴く」の題で、「父や母に甘えたき齡を癩園に隔り住む少女の歌ごえきこゆ」「全国に放送はすれ癩者らのひとりひとりの名は秘めてあり」「癩者らの日々の生活の放送は歌舞伎も入りてやめるともなし」「ひそかに父やまた子を癩院へ送りゐる家族も聴きてぞあらむ」「凍

みとほる風鳴りにつゝたくれぬ消^けのこる雪は昏れあへなくに」などを詠んだ。黒島美津志は6首（「訪へる人の少なき此の島に慰問の人の来たまふ今日は」など）、永井花子は8首（「火鉢かこみ島の噂^{はな}を聞きゐしが歌書^{はな}を読まむと座を立ちにけり」など）を寄せた。余白の挿絵は椿の花か。

「編輯同人」の肩書がついた江田島龍子と植田弦月は、それぞれ3句の「俳句」を寄せ、「弦月選」の「雑詠」には、橋本秋暁子、浅野日出男、橋本春月、土肥しぐれ、故渡辺天光、山田鶯子が総計24句を詠んだ。ページ末の余白には、「渡辺天光氏を深悼す」の文字。

さきの「短歌」のページには蕪や椿の挿絵があり、「雑詠」のところではそれぞれの句のまえに記号様のデザイン、悼辞には菊花と花籠がいっしょに描かれている。

静岡光子は2ページと2行にわたって、「山茶花によせて」と題した稿を執筆した。題字のうえには山茶花の挿絵。大島青松園で同時期に刊行された『青松』にくらべると、『楓』には女性の寄稿が多い。書き出しは、「お歌碑のまわりに、今年また山茶花は冬のさみしさをなぐさめるべく咲けるによせて」。「お歌碑」とは、つれづれの友となりてもなぐさめよゆくことかたきわれにかわりて、という貞明皇太后が療養所に下賜したうたを刻んだ碑である⁷⁾。

静岡は、不治の病の身ながら「せめて山茶花の様にめぐり来る冬だけでも、希望の血潮を真紅にもやし、身にひそむ情熱を思ひのまゝに表現出来たら世に人と産れた甲斐があらうに」と嘆じつつも、その山茶花に寄せて、「じつとだまつて島の吾々の私生活をながめてゐることだらう。そして婦人に対して、今盛んに叫ばれてゐるデモクラシー、男女同権にめざめよと叫んでゐることだらう」と時局のとらえ方をあらわす。山茶花への仮託は、「島の婦人よ、もつと勉強せよ、男子と肩を並べて歩けと叫んでゐることだらう。／もつと頭を上げて歩き、女は男のよき伴侶であり、又よき母親であれと叫んでゐることだらう」と進み、「今や公民権があたへられたのである。こせこせしないで大陸的な気持になり、大いに一般健康な婦人と肩をならべよう」とうったえ、最後に、「光明ユートピア建設の為に、婦人よ目覚めよと、声かぎり叫んで唇から血がしたゝり出た様に、その花びらを真紅の八

⁷⁾ 御歌碑は、おかひ、と音ずるのだろうか、おんかひ、みうたひ、なのだろうか。

重にさかせて、静かに朝のフレッシュな空気を吸ふてゐる山茶花よ。私は同感だ」と山茶花を持ち出して稿を閉じた。

静岡の執筆稿が2行を使って終わったそのページの余白には、1本の足を長くのばした蛸と、5匹の魚によって囲まれたなかに、「楓編集部」による「読者諸氏へお知らせ！」と題された稿がある——「純文芸雑誌として発足しました「楓」も、その後の園内各層の希望と発展のために、総てを開放し総合雑誌として、新発足することになりました。投稿種目も異つて各方面のものを受付けますから奮つて御投稿あらんことを希みます」。

この『楓』は、「総合雑誌」であり、また、「純文芸雑誌」としてつくられたというのだ。

終わりに、梅花と男雛女雛の挿絵とともに「吐詩朗」による「後記」がついている。そのいくつかをとりあげよう。

◎楓も創刊号を出したなり、遂に二月は発行出来得なかつた。お正月気分が抜けなかつた為か原稿の集りが非常に悪かつたことや、役員総選挙等で遂に二三月合併号として遅ればせながら第二号をお送りする。切に御寛恕を乞ふ次第である。

◎本号の園長先生の御文章は、春らしい快ニュースである。プロミンの福音が我等の上にもたらされる日が真に待たれる。

◎短歌欄に、利根俊夫、上森香穂子両氏が力詠を寄せられた、特に利根氏の「苦るしき日の思出」は尊く得難い作品で、惻々として迫るものがある。御味読の程を御願する。

◎編輯同人の村田兄が僅の間に両足切断といふ誠に御気毒なことになつて、何とお慰めしてよいか、兄の心情や又如何に……為に本号には、兄の文をも載せ得なく誠に淋しい限りである。こひねがはくば順調の経過をたどり一日も早く快復され再び文芸会の為御活躍あらむことを願ふものである。

——やはり創刊号はつくられていたのだった。

最後のページは、原稿募集の欄と奥付となる。「募集項目！／一、文章 論文、散文詩、感想文等総テヲ含ム／一、詩 以上幾編ニテモ可／一、短歌 十首以内／一、俳句 同右 当季雑詠／一、冠句 “ちらほらと” 五句以内／一、川柳 五句以内／メ切四月十五日／選者 文芸会楓編集部」と多様な種別の原稿を募集していた。

奥付にあたるどころの記述は、

昭和廿一年十二月 日許可／昭和廿二年一月一日第一号発行／昭和廿二年三月十五日第二号発行／編輯者 文芸会編集部／発行者 文芸会

——ここにもまた、海藻、海星、珊瑚、貝の挿絵がある。やはり、第1号は発行されていたのだ。1947年元日に発行すべく準備をしていたのだろう。

『楓』第2号、1947年3月15日発行、本文35ページ。

第1巻第3号 「4、5月号」と記された表紙の号にもまた、「楓」の題字があり、それはさきの号と同一。ほかには、首の彫像、壺、書物などと星模様が描かれている。さきの号では白紙だった表紙見返しに、この1冊きりの手づくり雑誌の回覧順が記されている。「日付ニハ必ズ次ノ方ニ御廻覧下サイ、／一部シカアリマセンカラ大切ニ取扱ヒマセウ（上林）」と記されている。その回覧順は、月日と（おそらく）寮の名と氏名が記されている（20名）。人名をあげよう——藤本とし、山田法水、橋本秋暁子、原よしじ、幸田定夫、上田弦月、橋本春月、浅野日出男、山野うしほ、山川夢草、日花ひとし、中村七鶯、鈴木健子、土肥しぐれ、永井花子、永井静夫、山川起代志、山本実、飯崎吐詩朗、瀬川秀夫。日付によるとひとりが冊子を持ってられる日数は1日となっている。

扉には、犬と赤ん坊の人形の挿絵、そして、左から右に「四五月合併号 楓 第一巻第三号」「文芸会楓編集部発行」の文字。原稿用紙はやはり、「コクヨの165規格A4」「十行廿字詰」。その裏面の「目次」は掲載稿が、村田義人「巻頭言」、藤本とし「転心」、同右「私はかく思ふ」、江田島龍子「生活と俳句」、千島染太郎（題目なし）、橋本秋暁子「選者詠」、「編輯同人詠」、「秋暁子選（俳句）」、「吐詩朗選（短歌）」、千島染太郎「詩 天国の模型」、大川鉄次「同 コスモス」、瀬田ひろし「同 自慰」、山河起代志「同 病床譜」、編輯同人「後記」であり、そして千島染太郎が表紙とカットと報せている。藤の花のような挿絵。

「巻頭言」を執筆した村田義人は、前号「後記」で両足切断と知らされた編輯同人だろうか。彼はまず「日々新聞に掲載され、ラヂオで放送される東京裁判から、吾等はなにを考へ、なにを学ぶべきであらうか」と問い、「戦敗国の惨めさと、全く欺かれてゐたと云ふ憤懣…たゞそれだけでいゝのだらうか。宇宙の真理に悖いて、聖なるものを暗黒に閉ぢ、

真実をも虚偽と云ひ、邪悪を正義に塗り換へた行為が如何に審判れ、如何なる結果を招来するか。それを学ばずして、なにを学ぼう」と返し、そのうえで、「翻つて吾等の周辺を省るとき、これに類した事柄はないであらうか」とあらためて問い、「正義が正義として通らずに、とかく圧迫排斥され、邪悪と虚偽が真実らしい仮面を粧つて横行する。その様な事実はないであらふか。惨苦に満ちた敗戦と云ふこの現実を凝視するにつけても、吾等はいかにることを黙過し、その様な愚さを繰り返してはならない」と警告する。そして、「なにかの折にはよく口にされる、吾等の楽土建設も、一切の虚偽と邪悪を徹底的に粉碎し、宇宙の真理に基いた、真の正義と愛を行わずしてどうしてあり得ることだらう」と主張した。

藤本トシの「転心」には「小品」との形容がついていた。またそのなかには、「私はかく思ふ」との見出しがつけられ、小品のなかにまた掌編があるのか、2つの短編が綴られているのかわからない構成となっている。2つの稿につながりはうかがえない。1編めは場面が療養所の内なのか外なのか不明。「月の内半分以上を臥て暮す」京子が登場し、「皮肉な言葉や、冷い仕打を浴びせられて来た」彼女が「仏道を求め〔中略〕お経をしつかりと生活の中に生かさねばならない」と決意し、「それからの彼女の心境は一変した」（だから「転心」か）という展開が4ページ弱の紙幅で記されている。2編めは、「今日は憲法実施祝賀当日」の2時に「模擬店に吸ひ込まれて行く人の群」をとらえる。だがそれが療養所内外のいずれなのかわからない。

民主々義、男女同権。成る程それに相違ない。開放された婦人達が伸び伸びと、自由に己が天分を發揮し世界に誇る文化国家を建設するため、力一つばい貢献して行けることはうれしい。しかし、これからは目上の人も恩人も流目にかけて、我意我慾を満してはゞからないのだと、早合点してゐる婦人があるなら、それは誠に嘆かわしいことだと言はねばならぬ。／優美と謙譲を失つた女、それは戦慄にあたいする。

——いわば新時代をむかえつつあるとき、かく苦言を發したものは、「病み古りた私ゆえ、いまから高い教養を、しつかり身にするには、とても望みがたいとしても、せめて世間一般的な常識ぐらひは具へ、男子と語り合つても、さほど恥しくないほどの者には、なりたいと希ふ」というのだから、この「私」は療養所に暮らすものか。最後に、「あまりにも

激しい世の変遷に途惑ひしてゐる私のためにより一層のご教導をお願いする」と希望と願意が示したのだから、「私はかく思ふ」という題目か。

この稿の余白には、「カールヒルティ」(Carl Hilty)の「愛」と「利己主義」の議論が転載されている。

江田島龍子の稿「生活と俳句」は、まず、「先人は生活と俳句に就いて子規後盛んに筆を執つてきた。殊に戦争の最中には、この点に就いて強調し、詩と離れてゆく生活を引締めやうと努力した」と戦時期を回顧した。ついで、逆接の接続詞をおいて、「だがそのうちの幾人かは転落して再び詩の道をあゆむことが出来なくなつた。これらは只風流と花鳥のみによつて俳句に入つた人達だと思ふのである」ととらえてみせた。

さて、戦時下の『楓』に寄せられた俳句は、なにを、どう詠んだのだろうか。1944年7月5日に第9巻第7号を発行したのちに「暫時休刊とする事に決定した」、同誌の戦時期発行分が今までちかにないため、かわりに大島青松園で編集発行されていた『青松』をみると、1944年末と1945年1月の発行号に載る俳句は戦争をうたっていた(たとえば、「敵艦に爆散る神鷲国の秋」など)⁸⁾。他方で、「流れきて雲ひろごりぬ後の月」といった句もあった。だから、「殊に戦争の最中には〔中略〕詩と離れてゆく生活を引締めやうと努力した」ものたちは、ひとり邑久光明園在住者にかぎられず、大島青松園やほかの療養所に暮らすものたちもまたそうした力詠に努めていたことだろう。

では、江田島の記した「だがそのうちの幾人かは転落して再び詩の道をあゆむことが出来なくなつた」とは、いったいいつのことなのだろうか。戦時期なのか、ようやく2年が経とうとしている戦後なのか。また、「これらは只風流と花鳥のみによつて俳句に入つた人達だ」と考えるとき、「生活と俳句」とを「風流と花鳥」以外のなにによつて詠むというのか。どうやらそれをここでは「美」だといっているようなのだ。

江田島はわが身にも目をむけ、「吾々のやうな病者には苦るしい長い療養生活がある、そしてその先には死が待つてゐる。私達は只苦るしみばかりを味つてその生活をつゞけるこ

⁸⁾ 阿部安成「手づくりで詠む—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用について」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.244、2016年1月、を参照。

とは人間としてつまらないことではないか、苦しみの中に詩を見出し美を見出すとしたら吾々の生活は決して満たされぬものではない、「一般健康人と互してゆける心の潤ひ」これこそ吾々が待望してみたものではないか」と、「病者」の位置から「生活と俳句」を説き、ひいては、「俳句」なるものを論じる。

俳句は虚偽を排し赤裸々なる人間を要求する。正しい詩を欲求し真実なる美を欲する。

／俳句はむつかしいものではない。そして又風流人のもてあそぶものではない、吾々の現在の生活の中に生き、そして向上してゆくものなのだ。

——「虚偽を排し」「正しい」「真実なる」の語をもってつぎへの展開を目指そうとすると、欺かれてきたと悔いる戦時からの転換がはかられていよう。

目次に題目が記されていない千島染太郎の稿は4編の箴言といったところか——「○歩調を合せることが真の和睦でも協力でもない／歩調を揃えてくれる友より同じ道を進歩してくれる友が欲しい」「○趣味に生きる人とはどの人のどの様な趣味をも尊敬出来き理解出来る人を言ふ」など。

橋本秋暁子は「近詠」と題して、「うつくしく松のみどりにあいまあり」など俳句10句を寄せ、それを囲む罫の外側に蔓と葡萄の房が描かれている。そのつぎのページには、「ちるはなをひるがえすかぜひとつづつ」「はるのあめうれしきひとゝあるまどに」の2句に千島染太郎は「はるのまど」との題をつけ、江田島龍子は「春逝く」の題のもとで「母となる日のなき妻や苗を植う」「牡丹のゆらとうごきて医師来る」の2句を載せ、4句の上下を9匹の栗鼠が囲む。

「秋暁子選」の「雑詠」は8名による32句——「春雷のあとに来るもの蝶一つ」（植田弦月）、「蝌蚪^{かど}の群日射し薄れて沈みけり」（鈴木健子）など。蝌蚪はおたまじゃくし。その余白はこれまたインク瓶か薬瓶の挿絵。白く抜かれたそのなかに、「路辺の草花一つも見る人によつては色々に愛まれるものなのだ／作品を発表する喜びと怖れはそこにある／その喜びと怖れに感激してものを創りたい。／もの創るものがこの世で最も勇敢だ」と記されている。

「飯崎吐詩朗選」となる「短歌」は、まず、利根俊夫「春の瀬戸内海をゆく」と題され

た9首——「春かすむ瀬戸の内海や釣舟の天と海とのほざかひに浮く」「築港の波止場に乙女三人が赤きパラソルをかざしてありき」など、永井静夫「さくら」は9首——「陽の光り透せぬまでにさくら咲き花の下花は紅ふかきかも」「水のごと夜明けの色のひろごりに泛びて白しさくらの花は」など、黒島美津志8首——「きびしくも糧^{かて}なき世なり増産の種芋植うる春日ぬくきに」など、山川夢草4首——「たけりたつ波のうねりにまむかえば心のうれいはれし思ひす」「ささやかなこの庭畑に植うるべくなすやきうりの苗を作りぬ」など、山田法水4首——「インフレはいやかうえにも高まりて生活^{くらし}にあへぐいたつきの身は」「耐へ耐へてからき生活に療養の友等侘びしく日々に逝きける」「病み古ればかなしきものか日和よき五月半に布子をまとふ」「山にきてみ社あとに聞くものは鶏の遠音と満ち潮の音」と「芝居見物」と題された1首「どつと笑ふ観衆の声はなにならむ妻^{はなし}の説明を待つにまた笑ふ」、永井花子9首——「産むを許さぬやまひかなしもをみなごと産れ乍らに母にはなれず」「産むを許さぬ病はかなしをみなごの母にはなれず妻^き古びにけり」など。

「天国の模型」の題がつけられた千島染太郎の「詩」は、「光の籠^{ろうこう?} 冥」「天国の模型」「美しき瞳」「夕べの祈り」の4部にわかれる不定型詩。大川鉄次も「コスモス」と題した詩で、「はなれ住む友をもとめて／幾山河へめぐり来れば／山近き白亜のやかた／七色の朝陽に映えて／ゆかしさよコスモス咲けり」と題にかかげたコスモスをとりあげ、「弱き身の^{きが}性は知れども／コスモスは健気^{けなげ}なる花／吾も亦強く生きな／高殿の窓をひらけば／はろばろと秋空高し」と、その花に拠ってわが身と意思をうたった。瀬田ひろしの「自慰」では、「切り断した両脚」で「灰色の布団の中に／便器を抱へ／ベットのくぼみに身を埋めて」生きるもののある日が詩となり、山河起代志は「冷切つたベットの上で／窓外の裸木を揺する季節風の音を／聞」く「病める身」のものが「ガラス戸越しに」みえる「とびが二羽」に「老いた父母」へ願いを「伝へて呉れ」と託す詩を「病床譜」と題した。

目次にはなかった、千島染太郎の題目「ミルクが欲しい」という詩もある。末尾に「今宵も／嘘でない ミルクが欲しいネ」とはそのままの意なのか。

「上林」による「後記」は4つの項と1つの箴言様の1文からなる。第1項は「夏は矢張り吾々には何となく清々しいものを感じさせる」と結ばれ、第2項と第3項は本号のよ

うすを省みている。

◎遅刊に遅刊を重ねた楓を皆様のお手許にお届けすることは編集員として誠に汗顔の至りであり、しかしそれも原稿不足でこの打開も皆様の熱意如何にあるので会員諸氏は楓発展の為に一層の力をお供し下さるやうお願い致します

◎詩謡は思わぬ収穫であります、文章は園内募集よりの転載であつてスポーツの復興と俱に文芸方面も一層の努力を期待して止みません

最後の項は、

◎文化国家としての日本は一人か二人の傑出した人物よりも全般的に標準の高い文化人を要求してゐます、そうした意味からも遅刊を取り戻し楓の真の意義をこうようして文化国家の一助と為し得たいと存じます、会員諸氏もこの大いなる意気で御投稿下さるやう切に願致します

最後の1文は、「○黒いものの中には鼠^{ネズミ}色も白く見える」とある。いくらわかりづらい「後記」だ。

最終ページは「募集種目案内」と奥付。前者は、「文章 論文・創作・コント・等幾編ニテモ可／俳句 十句以内／当季／雑詠／短歌 十首以内／詩 幾編ニテモ可／その他 文芸ニ随スルモノ／楓編集部選締切毎月十日」とのこと。

後者は、「昭和二十二年六月十日発行／（第一巻第三号）／編輯者 文芸会楓編集部／発行者 文芸会」と記し、そして、「非売品」との明示がある。

『楓』第1巻第3号、1947年6月10日発行、40ページ（目次にはノンプルなし、奥付にはあり）。

第1巻第4号 これまでとおなじ「楓」の題字と号数「6. 7月号」との表示がある表紙の号には、蝶、果実（枇杷か）、そして本などが描かれている。

表紙見返しにはやはり「廻覧順」が示されているが、前号とその順も人数（26筆）も異なる。その名を順にあげよう——美濃田明、植田弦月、橋本春月、浅田湖月、日花ひとし、中村七鶯、山田夢草、土肥しぐれ、鈴木健子、橋本秋暁子、原よしじ、寺西定夫、山田法水、藤本とし、浅野日出男、山川清、永井静夫、永井花子、山本実、飯崎吐詩朗、津島久

雄、少年少女、瀬川秀夫、竹村栄一、畑一馬、千島染太郎（「戻り」）。1人あたり1日は前号におなじ。

ここにはまた、「投稿下さいました方より廻覧致します／御覧の通りの貧弱なものになりましたが、続刊の願ひは失つてみません。皆様の御協力を希望してやみません。染太郎／22. 9. 12」とも記されている。

この号の扉には、左から右への横書きで「第一巻第四号楓六、七月合併号」「文芸会発行」という文字が2段に記されていて、そのあいだに、バット、ボール、グラブ、ペナント（「光明」の文字）が描かれている。邑久光明園でも野球が盛んにおこなわれていたのだろうか。

扉裏には「目次」——「巻頭言」、瀬田洋「随筆 義足」、上林龍「短編劇評」、「詩 原よしじ選」瀬田ひろし「手摺に倚る」瑞穂葦雄「憂鬱なる日よ」、「俳句」「卯之花同人集」「編輯同人集」「雑詠龍子選」「選后感 龍子」、永井静夫「短歌 雨」、染太郎「ひなどり句会報」、染太郎「ひなどり句会に祈る」、「編輯後記」、「茨咲く道の矢印／阿部知二集より」、そして、「表紙／カット」が千島染太郎であることにくわえて、「筆記」が上林直吉、千島染太郎、瀬田洋の3名によっていることが明記されている。

原稿用紙はこれまでとおなじ。

「巻頭言」の署名は「村田」とのみ。冒頭にまず「なによりも先づ吾々は人間とならねばならない」との自覚をあらわし、それを病友に呼びかける。それは、「新憲法は吾々にも基本的人権を賦与した。しかし吾々が一個の人間に価値するものとならなくてはそれも結局画餅に帰してしまふ」と時局をふまえ、それにふさわしいわれわれになるべきだということである。

「吾々は長い間天刑病者施療患者の名の下に封建的な圧政を強られて来た。而してそれは吾々をして人間としての誇りも価値も喪失させ奴隸的屈辱的なものに墮さしめた」と過去がふりかえられ、しかし、「吾々の上のしかゝつて来る権力や威嚇にたゞわけもなく慄え戦き、またはそれらに媚び諂うと言つた、実に卑劣極まる生活を持續させた」とわが身が省みられる。ついで、「新憲法は公布され吾々の上にも黎明が訪づれた。併し長い間の習性に墮して剥奪された人間性を取り戻し新しい時代の息吹きを真に呼吸せんとするものは

寡い」と現状の問題点がとらえられ、「吾々と云え共宇宙的存在であり独立した一個の人格をもつ人間であるのだ。いまこそ一人々々がそれを深く認識し体得しなければならない。時としていまは吾々の上に飛び交ふ偉大さのない権力と威嚇を粉微塵に打ち砕き、吾々の内部に真の自由を獲得するためにも吾々は先づ独立した一個の人格を有する人間とならねばならぬ」との指針が告げられたのだった。

「義足」と題された瀬田洋の稿は「随筆」とのこと。「早くから頼んでおいた義足が、やつと出来てきた」と始まる文章には、その義足を両脚につけてからの随想が綴られてゆく。つけてまず「畳の上を歩いてみ」と「割合楽に歩けた」、「それから両脇の松葉杖に、出来るだけ体重をもたせかける様にして、少し歩いてみた。実に楽々と歩けた」、「出来ることなら、松葉杖なしで歩きたい。それがわたしの念願であつた」ので、「先づ片一方の松葉杖を脇からはがして歩いてみた。少し無理なやうな気もしたが、やつぱり楽に歩けた。そこで今度は両方とも松葉杖を離した。たゞ義足だけで立ち歩んでみた。それでも矢張り、立派に歩けた」、「一緒に住んである部屋の人がステッキを貸してくれた。それをついて歩くとまた少し楽だつた」、「うまく歩けるではないか。」「もう大丈夫だ。」「よかつた…よかつたね。」部屋の人達が口々にさう言つて悦んでくれた。私も嬉しかつた」との快活な気分も記されてゆく——「少しの圧痛も感じずに、楽々と歩ける様になるまでには、長い日時を費すでもあらう。それでもともかく、かうして歩けると言ふ目安のついたことは嬉しい」。彼が「両脚を一挙に切断したとき」は「八ヶ月前」のこと、そのときは「かうして歩けることなんか、一寸考へられもしなかつたので」あるから。あれこれ歩くようすを思い浮かべる。

すると、「そのうち、杳い少年の日竹馬に乗つて飛び廻つたことが、不意に浮び上つて来た。かうして義足だけで歩いてみると、丁度あの竹馬に乗つたそのまゝの心地だつたから…。するとあの時覚えた、体のこなし方まで甦つて来てますます愉快になつた。私は晴れた大空の下を馳け廻る少年のやうなうきうきした気持になつて、十五畳の部屋の中を、ぐるぐる歩き廻つた」という。

だが——「けれどもその悦びは、さう長くつゞかなかつた。しばらくすると私は、畳の

上にへたへたと座つて、義足を脱いだ。いつか全身には汗がいつばい吹き出てゐた」。なぜか——

夢中になつて歩き廻り、もし傷でもつくつたら、それこそ大変だ。その懸念が、私に歩くことを中止させた。履いて歩たときは左程感じなかつたのに、脱いでみると義足の無恰好さが、ひどく眼につき出した。

——義足が不恰好というだけではなく、「その義足を履いて歩く為には、ガーゼや繃帯を用ひて、膝やその下部を幾重にも包まねばならない。その姿は吾れながら醜くむさくるしかつた。こんなむさくるしい姿をし、こんな無恰好なものをくつつけても、尚歩かんとすることがなぜか未練がましく、女々しい者の様に思へて仕方なかつた。そんなわたし自身と云ふものがさもしくなり、腹が立つて来た。(こんなものをくつつけて歩いてみたところで、どうしてかつての日の如き快い感触が味へよう……。) 急に激しい自己嫌悪がつき上げて来た。脱いだ義足をどこかへ思ひ切り叩きつけたくなつた」というのだ。

そして、「けれども子供の様に、それも出来ないことが、私をだんだん深い悲しみの中に引き摺り込んで行つた。いつか私の瞳はうるみ始めた。うるんだ瞳を義足に投げかけたまゝ長いこと私はそうしたまゝであつた」。

義足をめぐる、^{らく}楽さ、うれしさ、愉快さ、心配、躊躇、不恰好さ、憤り、悲しみ、というこころのありようがたどられている。ひとつところにとどまらない、こころの蠢きやざわめきの描写である。

転じて著者は、「もう彼此、十年も昔になるであらうか。いまは亡き友永見祐兄が、「脚の弁証法」と云ふことを語つたことがあつた」という。ここにいう永見の名が「祐」ではなく「裕」であるとしたら、彼は大島療養所に生きた療養者かもしれない。永見裕は『癩人文学』と題した書籍を、1937年に大島療養所患者慰藉会から発行している。「著作集第一巻」とつけられたものの彼の著作はそれ以外には確認できないし、彼の没年もまたわかつていない。

それはともかく、「脚の弁証法」とはなにか——「前後に踏み出す脚の互に相反撥する運動によつて体が漸次前進する。それを巧く正反合に結びつけ、吾々の社会の発展形態に擬

へて話してくれた」というのである。そのことが義足にどうつながるのか。

歩きたい。ほんの少しでもいい。どんな醜い格好でもかまはない。歩けるものならなんとしてでも、歩きたい。さうした本能的な強い慾求の反面には、常にさつきの如き暗い翳が伴ふ。それはまたどうかすると、歩きたい、歩かねば……。と云ふ真実なものさへ、もみ消してしまひさうになる。而も面白いことには、吾々が意識する、しないに拘らず、それが常に一つの反撥力となつて働きかけ、吾々を一つの方向に向け進めて行く。所詮、人間の心理もまた、弁証法的な反復を繰り返して、生成し発展して行くものか……。而してそれを、本当によく呑み込み、体得した後にこそ、こんな義足をつけても、快い歩行が出来るのではあるまいか……。

——まあ、弁証法などといわずとも、ここに記録された心情は、ゆきつもどりつ、三歩すすんで二歩さがる、といったていどのことではある。小学校のクラスでひとり眼鏡を掛けざるを得なくなった女の子の気持ちというところでもあろう——よく見えるけど恥ずかしい、ちょっと自慢だけど浮くのはいや。「随筆」とは、「特定の形式を持たず、見聞、経験、感想などを気のむくままに筆にまかせて書きしるした文章」とのこと（『日本国語大辞典』小学館）。躊躇や戸惑いといってよいか、みずから手こずる、持てあましてしまう気持ち、これが「気のむくままに筆にまかせて」記録されたことを忘れずにおこう。

この「義足」と題された「随筆」には、下駄と朝顔に蜻蛉の絵が添えられている。

上林竜の稿「短編劇評」には、「光明劇団春季公演」の文字も添えられている。この時期の園内での芝居興業については、どのくらい情報が残っているのだろうか⁹⁾。いつ、どういった芝居が、だれによって演じられたのか、興業をささえた集団はだれによってまとめられたのかわからないなか、劇評はきちんと記録されたのである。ここに記された演目とおもわれる題目をあげると、「心の綻び」「茅の浦波」「月と拗物」「観音開帳」「赤縄」「浦の苦屋」「国定忠治」。劇評の一端をあげると——「私は当劇団が現在の位置から今一步前進して貰ひたいと念願してゐる、それには時代の流れも充分考慮に入れる必要もあり、又

⁹⁾ 大島青松園での芝居興業については、阿部安成「自治のアトラクション—大島の自治は踊る大演幕」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.175、2012年10月、を参照。

劇団の再編成も必要かも知れないが古い型から脱して新しい出発の気持が必要であらう」と、概して厳しい批評がみえる。8ページの大作。

「原よしじ選／詩」は2編、瀬田ひろし「手摺に倚る」は面会人を、しかも母をうたったものか、「口をひらけばお互ひに／相ひも変らず／生きることの厳しさと／哀しみばかり」と。瑞穂葦雄「憂鬱なる日よ」は、「一人立ちて／孤独なる日の影を見つめて泣きぬ／一人にて生くことは寂し／されど生れざりしならば更に寂しかるべし／彼の佛見られざるべし／彼の静かなるまなざしも」とうたわれた「彼」とはだれか。

「俳句」は、「卯之花同人集」と「編輯同人集」とがそれぞれ1ページずつに記され、前者には植田弦月「夏から秋」が5句（「夜は秋の月ひつかゝる臥松かな」など）と橋本秋暁子「銀河」5句（「銀河すんで癩憩ふ石の一つづつ」「銀河果てなく癩をふりきる遠さあり」「銀河果てなく癩に星屑こぼれをり」など）、後者には千島染太郎「葡萄」5句（「つぶらなる月の光の葡萄食ぶ」など）と江田島龍子「暑」5句（「洋皿の白さに濡れてトマトかな」「チラと見る涙を背に雲の峰」など）。

「雑詠 龍子選」は、松村弘哉、橋本春月、日花ひとし、山田法水、橋本秋暁子、山野うしほ、浅田湖月、浅野日出男、松尾進による18句（「鶏頭燃ゆ妻の忌日の近づきぬ」など）。長い「選后感」がつく（龍子による）——「応募句集が少なくなつて合併号であり乍らこれだけしか発表出来なかつたことは誠に残念なことである。それにはいろいろと現在の吾々の生活からくる障害もあるが句作することが吾々の熱意を動かさない以上困難なことだ。現時は句作は苦作となつてしまつてゐる、しかし少数な人達でも精進してゐる事實はやがて元の卯之花の中心となつてゆくことを心から希つてゐる、／遊芸の域から実生活の写実へ、今迄はたしかに遊芸の一隅にあつたと思ふ、古い衣をなぐり捨てゝ吾々はこの厳しい生活を直視しなければならない、そして一步前進して俳句の真の意義に到達したいものだ。龍子」。

句作をめぐり人びとをつなぎ、それをつづけてゆくこと、これが課題というところか。このページには蛇口から滴る水滴がいくつも描かれている。

永井静夫「短歌 雨」は10首（「母そはと会ふ日なからむ屋廂をひたひたとうつ夜更ふる

雨」「お茶の香のほのぼのたちぬこの朝のあめは心に丸くひらきて」「享けがたきいのちを
らいに褻れつゝなほ希ひけり大いなるもの」「弱き身を何くれと無し^{いたは}りて優しき人を吾持
てるかも」「ありやうはかたみのわれが人の世を四十過ぎて嘆きの果てず」など)。短歌の
うえに、雨降る線と傘に燕の挿絵。

「ひなどり句会 雑詠」をみるまえに、そのあとのページにある千島染太郎の「ひなどり
句会に祈る」を読もう——「雨の日でも明るい窓。艶やかな廊下。転つてゐるハジキ玉と
ピンポン球。緑の樹に囲まれ赤い陶瓦の屋根。双葉寮は光明園の玩具函です。／その玩具
函の中の一つがひなどり句会なのです、新しく描き上げたパステル画の様な柔かい色彩に
富んだ俳句を愉快地に作つてゐる子供の句会」だと紹介され、「常に野苺の一粒をのせて黝い
瞳を輝やかす少女や夏帽子の明るい翳に野球を憧憬れてゐる少年達の感傷と夢に触れる度、
私はいつもひとりココアを喫つた様に興奮して幸福を味ひます」とそれに寄せる心情をみ
せるようすは、情趣あふれる場がそこにあることを報せている。

句を寄せたものは12名。そのうちのひとりが千島なのだが、大人は彼ひとりなのだろう
か。姓がおなじ男の子と女の子は兄妹か姉弟か。慶子の句は、「朝食の膳にかざりし金魚草」
「扇子出し去年のことを思い出す」「教会の庭に咲いたるかきつばた」「足もとの岩に波立
つ夕涼み」「てのひらに小さく赤き蛇苺」。民雄の句は、「風鈴の音に目覚めし寮母かな」「夕
焼に里をこひつゝ散歩かな」「蟬涼し友は静かに眠りゐる」「熱冷めて涼しき友の寝顔かな」
「夕蟬や病める寮母は長椅子に」。義高は、「ピンポンのボールを流す風涼し」「体より脚の
大きな浜の蟹」「蟬の声山一面にきこえてる」「夏帽子友と並んで野球児に」の4句を。良
蔵は、「栈橋の向ひの山の蟬時雨」「大いなる影ふるはせて火取虫」「南瓜棚もれる光に蠅が
飛ぶ」の3句を詠んだ。敏子による、「兄さんの話きゝつゝ夕涼み」「夕涼み星がピカピカ
光りけり」、幸夫による、「叱られてもろこしの毛をむしつて」「子供等の泳ぎし波に月うか
ぶ」、照夫による、「松の間に月の涼しい海見える」、の俳句。そして女の子たち4人の句が
ならぶ——「夕涼み海へ柳がゆれてゐる」（照子）、「夕焼けてあじさいの花重たそう」（笑
子）、「縁側にすわつてながむ天の川」（小野貞子）、「川ばたに賑ふ声や螢狩」（千鶴子）。そ
して、千島が2句、「郷愁の水＝れ止まぬ金魚か」「蟬＝〔蟋または螿か〕の母恋ふ雨を降

らしけり」。

「編集後記」をみよう。署名は「雲が涼しさを孕んでる窓に染太郎」とある。

冒頭のひとつ書きは、「☆転覆した機関車の様に不恰好な体裁となりました。漸く六、七月合併号をお届けします、研鑽と努力の軌道を忘れて無理押しに季節を追ひかけた結果がこんな編集になつてしまひました」と本号の編集発行をふりかえる。掲載稿への評には、「☆瀬田氏の作品には、氏の新しい環境育成の汗が見えます」「☆上林氏の劇評は前月号に掲載する筈が遅れました。時間^{とき}はぬ色と香りはありませんながら薄い刺戟となつたことは担当編集子の犯かした罪の一つです。兎に角今月は事故の連続でした」とある。後者は掲載稿への不満や悔恨があるということか。また、「☆依然として詩謡と短歌は振いません。卯の花俳壇も活気がなくて雑詠に暗い影が見えます」と厳しい。他方で、「☆ひなどり俳壇の足跡を数えて見ると一寸卵を割る時の様な軽い希望が持てます。少年少女の作品に教えられます」との期待を寄せるようすをみせてもいる。

総じて、「☆文学音楽絵画に対する関心のある人は多いが理解のある人が少ないのはどう言ふ訳でせう？この様な趣味に生きる人達がたまたま変人あつかひにされたり邪魔者あつかひにされてしまふのが当園のもつ疾患の一つです。文化向上運動に対して鈍感な此の神経病にせめて新しい処方を記せる人と薬を盛れる人が幾人か居て欲しいと思ひます」と評する。病むものたちによる「疾患」「神経病」「薬」という比喻が気にとまる。そうした語を用いるとき、みずからの身体の病をどうとらえているのだろう。

最後に、「☆次号より馬力をかけます、一部発行の貧さはたえられませんがもう暫らく我慢して下さい」とのこと。

最終ページは、「阿部知二集より」「茨咲く道の矢印」の「転載」となった。自然美、自我と孤独と、もう1つの主題が「文学」だった——「文学といふものはただ現実を絵取るばかりが仕事でないと信じて来てゐる。自然の奥にも人間の奥にも必らず成る、より高いうるはしいものの投影が潜んでゐるのだとしか考へられず、現実の描写を通じてその投影の一片でもあらはそうと腕くのが文学の仕事であらうと思ふ」。

そして、「募集種目案内」と奥付。前号との違いは、「文章」に「随筆」がくわわり、「(原

稿ハオ返シイタシマセン)」との括弧書きがついたこと。

奥付は、「昭和二十二年八月二十九日発行／（第一巻第四号）／編輯者 楓編集部／発行者 文芸会／責任者 千島染太郎／非売品」。

『楓』第1巻第4号、1947年8月29日発行、37ページ（目次、奥付にはノンブルなし）。

第1巻第5号 題字はこれまでとおなじ1文字、左から右へ「8. 9月号」の表記のある号。表紙絵は、歯車、賽子、本——転がる、動く、とのイメージか。

表紙見返しには「廻覧順」。そこに記された名をあげると、浅田湖月、山野うしほ、橋本秋暁子、原よし志、植田弦月、橋本春月、有田すみ、永井花子、山本実、美濃田明、山川清、浅野日出男、寺西定夫、日花ひとし、山川夢草、鈴木健子、土肥しぐれ、村田義人、双葉寮（このみ3日間）、飯崎吐詩朗、瀬川秀夫、竹村栄一、千島染太郎。この一覧にはない「上林」の名で、「どうかして月刊にしたいと思ひつゝ今のところどうにも致方ありません／10. 11月合併号とし12月は月刊にしたいと思ひます／どうか皆さんの本として御協力下さいますやう願ひます」との記載。

扉にはやはり、「楓」の文字と、左から右への横書きで、「第一巻第五号」「八. 九月合併号」「昭和二十二年十月十五日／文芸会発行」とあり、梨、檸檬、葡萄と格子模様の挿絵。

その裏が「目次」——「巻頭言」、高橋俊一郎「或る人の話」、「ミルクの秋」、「俳句近詠」を稲葉楓子、植田弦月、千島染太郎、「俳句雑詠」が弦月選と同人選、瀬田洋「桔梗の花」、原よし志選の「詩」、短歌同人選「短歌」、染太郎記録の「ひなどり俳壇」、染太郎「句会が済んで」、三太郎「コント 猫」、「後記」、「肉体の灯影」、そして「表紙及ピカツト／千島染太郎」。

「巻頭言」は、「いろいろな物資欠乏の中にもより高く美しい精神の糧を得てそれに耐えて行く」ことを、ある青年の事例をとりあげてうったえる。「敗戦後の虚脱と昏迷は吾が国民の殆んど凡てを限界も知らぬ程の物慾主義と利己主義に追ひ込ん」でしまったが、「断じて利己主義でも物慾主義でもない」「民主主義」をとおして、「吾吾個人一人一人が心的物的に高まることによつてのみ、真の社会国家の発展向上」を目指そうと宣べ、あわせて、「人はパンなくしては生きられない。しかしまた人の生きるはパンのみにあらざることを、人間

の人間たる所以は実にこゝに存することを吾々はいま一度胸にハツキリと刻み込む必要があらう」と呼びかけている。署名は「村田」。

高橋俊一郎の論題「或る人の話」にいう「或る人」とは、たとえば、王陽明、十七条憲法の条文作成者、宮本武蔵、となる。「学生の頃から何れの宗旨であらうと」それに魅かれ、「ある期間は出家しようかと迄考へ続けたこともありながら、現在の私を振り返つて見ると、たゞ煩惱の湧きいづるまゝに、身もだへしてゐる自分に気付く許りです」という「私」は、どの宗教でも「ありのまゝの自己を見るといつて居るのは即ち悪人なる自己を発見し、そこに道を見出してゆくといふことではあるまいか等と感じて来た」ところ、そのむつかしさを重くうけとめ、「ぎりぎりの所まで追ひつめられた自己を見出すには、どうしたらいいのでせうか。私は淋しさを見につまる程感じながら今この線を徘徊して居るのです」と告白し、「ありがたい」といふ気持を忘れなかつたときは、後から振り返つて、「和を以て貴しとなす」「我が事に於て後悔はせじ」という、「この二つの言葉から離れずに居たといふ安心をいつもいだかせられるのです」と記した。

この稿の余白には、雲、鳥、教会堂の挿絵と、ラング、プレード、アナトール・フランスの言葉の引用がある。

稲葉楓子「近詠」は5句——「敗戦の民にはあれど胡麻を刈る／平穩の二百二十日を旅にあり」など。後者は「旅」にでかけていたのだろうか、療養所にいることをそう称してみたのだろうか。

植田弦月5句（「月雲に星満天をひきしぼり」など）、千島染太郎5句（「喩がての身に爽かに山河あり／母そはを恋ふもろこしを喰みつゞけ／祈り涼し癒えぬ病ひと言ふからに／金魚の如く我あざむきし人を恋ふ／独学の貧しさに耐え梨を喰む」）。

「雑詠 弦月選」には、光本真澄4句（「一人きて立つ静心ちゝろなく」など）、浅田湖月4句（「親一人子一人残り門火焚く」など）、浅野日出男4句（「くづしたる小膝うつくし鳳仙花」「おごそかに検死終りぬ浜おもと」など）、木村とよ子3句（「秋草や吉備富士いまだ暮れ残る」など）、有田すみ3句（「蟹這へる涼しき朝の庭を掃く」など）、橋本春月3句（「この墓に父も在せりさるすべり」「来て見ればこゝもよいとこ草紅葉」など）、浅田湖月2句

（「稲の葉の露さきかけて光りけり」など）。余白には、「新人の投稿を歓迎します。多数となりましたら成年、青年、女子といふやうに別個に掲げたいと存じます。選評を各原稿に附して返戻します」との告知。

ついで、橋本秋暁子の5句にはすべて「癩」の語がある。前号の「銀河」の続編か——「癩といふ銀河は空に石は地に／秋風や癩見てくれる石一つ／秋草や癩が渡らう石一つ／癩の手に秋は穂草のきりきりす／銀河すんで癩かむものゝ梨一つ」。江田島龍子の5句は、「この月や故里の廢居に母と居る／コスモスや十字架の鐘は罪たゝく／闊歩すといえど十歩よ虫しぐれ／^{（もず）}鴟猛り夕陽に鉄塔かたむきぬ／宵月に泣く子をあやす男かな」。

前号第1巻第4号に、「随筆 義足」と「手摺に倚る」と題した詩を寄せた瀬田洋（瀬田ひろし）は、この号には12ページの長編となった題目「桔梗の花」の稿を載せた。「島」の療養所にいる「A君、B君」から、「僕が一度に両脚を失ったことについて、いろいろ心配し、また励ま」す手紙が届いたという。そこに記された「僕は兄が義足になられたことで、本当の癩病に、一人前の癩者になられたのだ。と、祝福したいと思ひます」の言葉に、「君達は、どうしてまたあんな言ひ方をするのであらう」と憤慨する。彼自身は、「この癩を宣告されてから、既に十数年になる。それにいまだ一度たりとも、それを心から幸せと思つたことはない。いまもつてやはり癩者よりも、健康体がいゝ。不可能事だから諦めてはゐるものゝ、もしこの癩が全治するものだつたら、癒りたい。況んや一人前の癩者になつたことが、どうして悦べるであらう」と考えるから。

彼も、A君やB君が「どうした意味を含めて、さうしたことを言ふのか、その解らぬ僕ではない」とはいう。「宗教的、信仰的な考へ方」から自分もそうした思いを持ったことがあると彼自身も明かすが、しかし、それはたいてい「単に頭だけで解り、一つの知識として識つてゐるにすぎない。本当にそれが血となり肉となつて、僕等の全生活を支へてゐる様なことは滅多にない」と退けてしまう。

もしその真に出来得る人があつたとしたら、僕はその人を聖人か君子と呼ぶ。僕は両脚を一挙に切断し、その苦惱の真只中でそれを痛切に識らされた。僕は偽善者であり卑怯者であり、真に凡俗極まる一人間であることを識つた。十年近くバイブルを繙き、祈

りつづけてゐるのに信仰的にも未だ全く零に等しい自分を発見して、愕然となつたものだ。

と、彼は自己を語った。聖人や君子が癩を説いてもかまわないが、それでは「人間としての親しみや愛情は、感じないであらう」ということだ。

A君はこうもいう——「義足になり盲目になり、全身崩れて不自由舎に入り、病室に入つて、始めて癩の苦悩が解るのです。そこから人間の真実が始まるのです。軽症舎に居て、なんでも出来てどこへでも行け、なんでも言へる間は、一人前に癩の苦悩を口にしたり、人間の真実を云々する資格はないと思ひます」。これに対して執筆者は、「その様な言辭は、北條民雄一人だけで沢山だ。僕に言はせると、さうならなくては、癩の苦悩も、人間の真実も解らないなんて云う人は、さうなつても本当には、なにも解りはしないのだ」といいつゝのる。さらに、

僕は此度一挙に両脚を失つた。君達の言ふ一人前の癩者となつた。ずいぶん苦しみ、嘆き悲しんだ。しかしいま静かに、その苦悩を、かつてこの癩を宣告されたときのそれに比べてみると、此度の方が遙かに小さく、軽かつた様な気がする。此度と云へ共、僕はやはり死を考へてみた。けれどもそれはかつての時程の、真剣さはなかつた様だ。またそんな暗い心境から抜け出て、再びかうして起ち上る迄の時間に於いても、此度の方が余程短い。

ついで彼は「苦悩」を説く——「苦悩と云ふものは、その外見的条件の大小よりも、むしろその味ひ方の如何による。一見まことに小さく思へる苦悩でも、その味ひ方、噛みしめ方によつては実に大となり、反対にどんなに重く大きい苦悩の様に見えても、うかうかとして素通りして仕舞へば、なんでもないものに終つて了ふ。故に吾々が苦悩を透してこの世の真実を探らんとするなら、よしそれがどんなに小さく見える苦悩でも、それを軽く見逃してしまふことなく、とことんまで味ひ、噛みしめてみる必要がある」。

なぜ彼は手紙の送り手に反撥するのか——「君達のように聖人ぶつた、それが悪ければ、自分だけが真実苦悩を味つてゐる様な口をきく」からで、それよりも、「かつてK君が僕に書き送つた様に（カニューレーに恃む自己の生命を凝視しながら、日々を送つてゐます。

この様な姿になつて、果して生きてゐる価値があるのかと、疑つてみることもあります。)と、全く謙虚な態度で呼びかけてくれる方が、僕にとってどれ程嬉しく、胸を打つたか解らない」という。

憤りながら彼は、「こゝまで書いて突然僕は、君達の居る島に僕もゐた頃、あの裏山でみつけた、桔梗の花を思ひ出した。黄葉んだ蔓草の中に混つて、たつた一本、ぽつんとつゝしみ深く咲いてゐた桔梗の花、少し首を傾げる様にして折からの夕陽を浴びて輝いてゐたその姿……。僕はそれに妙な深い感動を覚えて、長いことそこに立ち尽くしたものだつた」。なぜいまその桔梗の花なのか——突然のこととみえるかもしれないが、これには「関連性」や「必然性」があり、「僕はもつともつと謙虚な気持になつて、各々の人生に立ち向つて行きたい」から、「あの桔梗の花を見つけた時の感動を、呼び起してゐるのだ」という。

稿の冒頭には、桔梗の花の挿絵があり、末尾には染太郎の署名で、「愉楽を感じ愉楽に酔つてしまふことのように苦悩もまた、自分が苦悩と信じそれに麻痺しれてしまうところの一つの幻影かも知れない」と記されている。

詩のページには、木村豊子の「秋日」が「秋の陽」に照らされた「山径」をうたい、千島染太郎の「血統の終止符」は、「『進化論』の論理^{ロジック}に宿る かの憂鬱のように／青白い手術灯の光線^{ヒカリ}に濡れて／私は静かに瞼を閉じた／麗しい人類の進化と／清められた地上の幸福と／そして孤独の私に残された／季節のない生涯を祈るために……」とは、断種手術の描写なのだろうか。

短歌のページでは、木村豊子が4首（「揚物のにほひほのかにたゞよひて夕顔の花あかるかりけり」など）、光本真澄1首（「つゝがなく二百十日も過ぎにけり心安らにつとめに出づるを」）。

今号の「ひなどり俳壇 千島染太郎記録」もにぎやかとなった。永森のえ子7句（「毎日の散歩の道や虫の声」「虫の鳴く闇に向ひて縁にあり」「草の葉の小さな風や昼の虫」など）、津島久雄7句（「ぬれ縁に虫きく人となりて坐す」「子供等の梨食ふ音をたのしめり」など）、立木民雄4句（「競ひつゝ寮をかこみし虫の声」など）、南龍一6句（「こほろぎの畳を歩む部屋静か」「虫籠の空ろに提れて軒にあり」「コスモスに別れし母は今は故く」など）、堤良

蔵4句（「秋の蚊の畳の面去りにけり」「暗闇に虫鳴く闇はなを濃く」など）、河山慶順3句（「はなれ住む妹こひし虫の声」など）、渦居貞夫3句（「こほろぎの我が足音に鳴きやみぬ」など）、本田幸雄3句（「物音に飛びだしてきし油虫」など）、横道清子2句（「虫鳴くや雲にほのかな月の影」など）、久保貴美枝1句（「虫の声きゝつゝ友と散歩する」）、そしてまた千島染太郎が7句（「郷愁の子と窓にあり雨の^{【もず】} 鶉」「妹の靴コスモスの風に鳴る」「子が歌ふ兔の歌の月夜かな」など）。

ここでも千島は「句会が済んで」と題した稿を寄せている。しかしこれは直截の句評や会評とはなっていない。子どもから「僕のプレゼント」と渡された「こびとの卵」とは「どんぐりの実」だった——「此の秋の子供のプレゼントは世にある高価な宝石にもまして大人の巷に疲れた心を豊かに楽しませてくれた。はたして現在のひなどり句会の世話その貧しい謝礼になるだらうか？」と自己を問うている。

三太郎の「コント 猫」の場面は、いわゆる社会、そこにいるある夫婦と猫が登場する。妻の妊娠に避妊具をみると、そこには穴が空いていて、猫のいたずらか、という話。文末の余白には、萩原朔太郎の文章が引用されている——「性欲と創作慾は人間の二つの強い情熱である、然しながら共に無用の情熱である」。

ついで「後記」、署名は「村田」——「◆「猫」は作品としては未熟ながら、その中に含むユーモアを掬むべきであらう。／◆「桔梗の花」については異論も多々あることゝ思ふ。かうしたことについても、誌上で論議することも、またずいぶん興味深いことではあるまいか。／◆短歌、詩は依然として低調であり俳句だけがこの園内で一番盛んと云へよう。しかしその俳句の盛況さは、必ずしも作品の優秀さを意味しない。俳人諸氏は宜しく既成の概念を打ち砕き新しい境地を開くべきであらう。／◆本誌がどうかすると、編輯者の同人雑誌の如きものに傾き勝ちになる。それは吾々編輯者一同の最も遺憾とするところである。どうか園内諸氏の大方の御協力に依つて、この「楓」が入園者一同のものとならんことを切望する」と。

そのつぎのページには、「肉体の灯影」との題が掲げられ、ダンテ、ラ、ブリュエール、ゲーテ、スピノザ、アンドレジイド、レーニンの言葉が転載されている。

奥付のうえに原稿募集の欄がなくなった。表紙とおなじ書体の「楓」1文字があり、「第一巻第五号／昭和二十二年十月十五日発行／編輯者 楓編集部／発行者 文芸会／非売品」とのみ。

『楓』第1巻第5号、1947年10月15日発行、43ページ（目次、奥付にはノンブルなし）。

第1巻第6号 表表紙には「楓」の題字、左から右への横書きで「10. 11月号」の表記、本、公孫樹、楓の葉の挿絵、そして十字架をデザインしているようにもみえる1冊。大増ページとなったこの号は、原稿用紙を使っていない。回覧順の提示もなくなった。

扉には、「第一巻第六号」と横書き、それと交差する縦書きで「十. 十一月合併号」、挿絵は馬と、もう1つは手毬か。「S・T」のサインあり。

目次は——「巻頭言」、岡田誠太郎「豊作（詩）」、美濃田明「一般意志に就いて」、橋本秋暁子「石落の花（俳句）」、「雑詠（同右）秋暁子選」、橋本秋暁子「選後感」村田義人「青年団・婦人会／コンクール雑感」、美濃田明「境遇の感謝（詩）」、瀬田ひろし「歩く（リ）」、瀬川秀雄「焦燥」、永井静夫「近詠（短歌）」、「短歌 永井静夫選」、上林龍「秋季公演／みたまゝ」、山田光子「琴（思ひ出づるまゝに）」、千島染太郎「ひなどり俳壇」、染太郎「後記」、染太郎「詩を作らない詩人」、藤森成吉「若き日の悩」、「愛」、「文化ノートより」、「詩を生む心（吉田絃二郎）」、「涙」、「表紙及ビカツト／千島染太郎」。

「巻頭言」（署名は「村田」）は、遠く関東平野の利根川大水害報道をふまえて、「此の度の利根川の氾濫の教へるところは数多い。その中の一つに、秩序のないところに真の自由はなく、自由のないところに真の平和はあり得ないと言ふことだ。あるものはたゞ混乱と破壊と滅亡のみだ」ととらえ、転じて、「自由主義は、いまなほ揺がぬ全人類の世界観だ。しかしこの自由を放縦と間違へ吾々の社会秩序を無視した自分勝手な行動を為すものゝ如く解する者の吾々の中に如何に多くあることぞ」と憤慨した。

岡田誠太郎の「詩 豊作」は、「受精せる雌蕊の愁よ」「満されし欲情の吐息の／倦怠とその憂鬱に／懶惰として夢は澱みて」「稲の穂の花粉のほめき／受精せる雌蕊の愁よ」などと、ひとの性をうたう。

つづく染太郎の「詩を作らない詩人」は、『「芸術は表現に始つて表現に終る。画を描かない画家、詩を作らない詩人などと言ふ言葉は比喻として以外に何等の意味もない言葉だ。』と言はれてゐる。／詩を作らない詩人然として詩を語つてゐる「痴呆なポーズ」を繰り返かえてゐる人の多ひことよ、その人達の中の一人として見出す自分の空ろな影が淋しい」とのこと。

美濃田明の「一般意志に就いて」は、集団や団体を論じる。ひとの集まりが「一体」をなしているばあい、その「共同の存立と全体の安寧とに関しては唯一の意志」があり、その「共同の福祉」とはなにがどういふようすなのかがだれにも明らかなのだという。だが、「社会（如何なる社会でも）の紐帯が弛緩し始めてその社会全体が衰運に入り個人的利益が漸く偏執されて小ブロックが大ブロックを動かすやうになると共同の利益はその本来の性質を失ひ、従つて共同利益に対する敵が現れてくる〔中略〕社会の紐帯がちぎれ最も賤劣な利益が「公共福祉」といふ神聖なる名を僭するが如くになると一般意志は影を没して一般人は皆私的な動機に依つて動き誰もが一般人としての意見を發表しなくなるであらう、そして私的利益のみを支持する不正な規範が規則と云ふ名の下に可決されるであらう」と論じる。

では、このとき、「一般意志は減じたといふことになるであらうか？或は腐敗したといふことになるであらうか？」と問う。その答えは、「否全く違ふ」と明瞭に否定する。なぜなら、「一般意志は常に不変であり不動であり清純無垢なのである」から。

ここから議論は、「自己の利益」と「共同利益」についてへと転じられる。両者はなかなか引き離しがたいのだが、これを分けたところで「公共の損害」が発生したときには、「個人一人が得る利益」の方が小さくなるというのである。だから、だれもが「自身の利益として公共の一般利益を強く慾してゐる訳である」。ついで、「何人と雖も各人から奪ひ去ることの出来ない各人の権利並びに少数の人以外には与へられてゐない発言権・提案権・妥決権・討議権などに関しても亦多くの考案を試み度く勃然たるものがあるが」、それはまたべつに論じるという。

いくらか論旨に混濁があるものの、みずから生きる「我等癩園社会」における自己、

共同、一般、利益、損害、権利を論じようとしているのだろう。

つぎのページでは、「藤森成吉作「若き日の悩み」より」、「性格の運命作用」の箇所が転載されていた。

橋本秋暁子「石露の花」はここでもまた「癩」を詠む——「石露咲くや癩真実を黄と定め／癩の芸は石露の黄に泣きつはたすね／石露は黄に癩の月日をゆるがさず／わがいのち石露にあづけて病守る／病める身に黄はかくちかし石露咲ける」。乱調か。

秋暁子選の「雑詠」は、日花ひとし 5 句（「白菊に午後の微熱の瞳をゆだね」など）、千島染太郎 5 句（前号にもあった「郷愁の子と窓にあり雨の鴉」など）、植田弦月 5 句（「まなかひに島の十舎の紅葉かな」など）、江田島龍子 4 句（「足組んで黄菊に見入る女かな」など）、橋本春月 4 句（「狐火やみとり疲れの眼に映ゆる」など）、有田寿美 3 句（「一面に波のまぶしき鶯の秋」など）、浅田日出男 3 句（「月光は青く湖心は死をまねく」「病葉や腰かけ憩ふ留守の縁」など）、浅田湖月 3 句（「足らぬ世を蟻の生活の変りなく」など）、木村トヨ子 2 句（「暮早し乙女の足のせわしげに」など）、山田法水 2 句（「月に蹴る軒の鬼の箱の音」など）、松村弘茂 2 句（「一トしきり鴉の高音の向きをかへ」など）、ふたたび浅田湖月 2 句（「性を解く老ひ若きかな秋の夜」など）、橋本春月もまた 2 句（「千畳のたゞみを替えて寮の秋」など）、高崎あつし 1 句、松村弘茂もう 1 句、中村七鶯も 1 句。

このページの末尾余白に、「楓誌の雑詠投稿は必らず投稿函へ願ひます」の告知。

選者橋本による「選后感」——「何かのはづみに一度でも休んでしまふと、永久に句作熱が帰つて来ないように思はれる自分達の生活にあつて、句作することも選句することもむつかしい事である」となると、「出来れば楽々と句作もしたいし、選句もして見たいと思ふが、いつれのかたちにもでも馴れさしてしまふわれわれの生活内容に、それを求めるには、それを打ち破るほどの努力を支へねばならない、生活を壊すほどの努力があつて初めて俳句が生れ、療養のありかたも知るものであると解してもそれになかなか到達出来るものでない」と厳しくもあり、他方で諦めもあるかのようだ。

「療養所の俳句はどこまでも趣味の範囲を出ないものであらうか、これは自分達俳句を作るものに課せられた問題であると同時に癩と云ふこのきびしい事柄だけでも今後の句作

態度を決めたいものであると思ふ。この頃の句会のさびれかたについても一層そうしたことが感ぜられる」との現状把握が記されている。

村田義人が、「(青年団、婦人会旗祭余興) / 歌謡曲 / 舞踊 / コンクール雑感」を執筆した。コンクールが開かれた10月16日にはまた、「不自由者には特に青年達が作業の余暇を利用して収獲した甘藷を給与して日常のつれづれをねぎらつたことも忘れてはならない」と附記されている。

村田の評は、やはり、厳しい——「平和日本、文化日本、民主日本を口にする者は多い。しかし、如何にすればその実現が可能か、その途を探る容易と心構へを忘れてはならないし、常にそれを心掛けて努力する者にこそ、自ずとその途も明かになるのではあるまいか」と大上段に振りかぶった。「この催事がやゝ可成りの成功を取めた」とのことで、その一因として村田は「産婆役を務めた司会者(井上)の思ひがけない上出来を先づ挙げ」た。「かつて職員の方々がこれに類した催事をされ、そのときの司会者と全く対蹠的であつた」というその出来とは、「その容貌に似合ないはきはきした動作でできぱきと事を運び巧みに諧謔を交へて観客の気持を絶へず舞台にひきつけた腕は賞讃に価するものであらう」とのこと。ただし「欠点」も指摘され、「言辞が貧弱で而もそれがあまり洗練されてゐないことだ。随つて出演者を紹介する場合にも同じ言辞が重複しその点ぎこちなさが目についた。言葉をもつと豊富にもち、それを自由に駆使して観客の気持を絶へず舞台へ集中さすにはまだまだ多く勉強しなくてはなるまい」との要求がついた。

では、3時間にわたつたという「歌謡曲、舞踊等」はというと、「そのどれもが余りにも素人糞く、下手すぎた」と斬って捨てられた。「唄を正確に間違ひなく歌ひ得る者は殆んどゐない」「全く垢抜けがしてゐない」というぐあいだ。「ともかくかうして催事そのものゝ出来栄は、実に不首尾であつたが、それにも抱らず多くの人々が最後まであまり座を立たなかつたのは日頃顔見知りの人々の演ずるといふところに、多くの興味を繫いだものとみてよからう」とはそのとおりのだろうが村田はさらに、「単なる余興であり、素人演芸と名附ける以上、顔見知りと云ふなじみ以上に、人間の魂に喰ひ込んで行くことを考へるべきではあるまいか」となると、これは苦言の域をこえた要望ともいえる。

最後に一言しておきたいことは、お互ひの耳をもう少し世界に傾けて行きたいといふことだ。此の度のものは、そのどれもが所謂歌謡曲であり、それも単に流行を追ふ安っぽいものが多い。シューベルトやブラームス、ジヨスランなどの作曲したもので吾々に親しまれてゐる作品は沢山ある。ベエトヴェンと云へば一がいにもむつかしいと考へがちだが、そのベエトヴェンの作曲したものゝ中にも「歓喜の歌」の如く、平易で而も実に荘重なりズムをもつたものもあることを忘れてはならない。私は若いゼネレーションの人々がかうして絶へず世界に耳を傾け、眼を見張られんことを諸氏のために希望して筆をおく

と閉じられた稿の末尾余白には、本文とはべつの手によって、「愛」と題された文章が記されている——「其の花を愛し その棘を憎むのは／真に 薔薇を／愛するにあらず」。薔薇の素敵な挿絵もみえるが、そこに棘は描かれていないようだ。酷評への反論か、緩和か。

つぎに、無署名の「文化ノートより」と題された稿——「○文化国家とは「文化をもつ国家」ではなく「文化を最高の原理とする国家」でなければならぬ」と掲げ、つぎに「○大衆の間に人間の尊厳と人格の自由を確立することなしには、また彼らの間に文化意思が振起され文化水準の向上されることなしには民主国家の建設は成らない」と指針が示され、「○文化は社会の飾りではない、それは健康な人の頭に現はれる美しい血色のやうなものだ。肉体の内部から輝き出るものである。／○文化とはきびしい現実追求の人間精神の所産である」とまとめられている。

美濃田明の「詩 境遇の感謝」は、「我は唯独り心ゆくばかりに清々しき／大自然の愛と恵に浸されつゝ／癩病と闘ふすぎはひのプランを／励み努むる我が僥倖よ」と歌いだし、「昔に^{カフ}変る 我が喜悅／昔に照らす我が境遇」への「感謝」をあらわす。

瀬田ひろし「詩 歩く」——

やがて木枯が吹き荒んで／大地が凍てついて／病み古りたこの体では／とても歩けないであらうから／歩ける中に歩いておかうと／義足の姿は哀しく／その音はさびしいけれど／歩けることはやはり嬉しいので／並木道を田圃の畦を／豚舎を牛舎を鶏舎を、／ほつつき歩いてすつかりくたびれて／堤の芝草の上に体を投げ出すと／高い煙突の向ふに

は／幽い山脈のやうな積雲が漂ひ／その奥から誰かが面をのぞけて／悔ひのないやうに
 ／歩ける中に歩いておけと／なにか気味悪い声で呼びかけるので／よろめく体を杖に支
 へて起ち上り／義足を鳴らして／私はまた歩き出す。

——さきの「桔梗の花」の著者の、まえへと歩きだす、うた。

「以上二篇原よし志選」とのこと。

「吉田絃二郎集より抄録／詩を生む心」から1つ——「☆芸術は最もシンプルでなくて
 はならぬ、シンプルとは最も原始的な魂と魂との搏撃である」。

瀬川秀雄の「焦燥」は、『楓』誌への寄稿がまとまらない焦りの心象を綴る。

永井静夫の「近詠」は、「眼を病みて久しく、また治ゆるみ込みなれば」と詠まれた6首
 ——「明日はあすはと思ひ希ひて弱き眼の視力たゞせし木は紅葉せり」「年古し癩病み居れ
 ば片眼の見ゆるはせめて生命とぞせむ」など。

その永井の選となる「短歌」は、山川夢草が「一度に両足を失ひたれど両義足で歩行が
 出来る友」へ3首——「^(再か) 岡 びは土を踏むべきことなきと嘆きし友は両義足で歩ゆむ／死も
 生も神にゆだねて祈り来し友は真の生命生きしか／歩けると友はのらして両義足こちこち
 鳴らし訪ね来にけり」とは、さきの瀬田への歌か。そして「ムーラン、ルージュを観る」
 と題して5首——「みちみつる若さのほこり潑刺ともえあがりたつ美の祭典は／やは肌さいてん
 に見入りて居ればあやしくも巳が心にきざすものあり／秋ふかみ御下賜の楓は色づきて大み
 心のまことにもゆる／かにかくに諦めてゐる吾が胸は文がらを焼くけむりたゞよふ／文が
 らは焼けばはかなく燃えつきてすぎたることの胸にいたみぬ」、題と歌のつながり如何。

木村トヨ子は7首は、萩、コスモス、菊を詠う。永井花子7首は、「ふみ入りて手折り来
 にけり道べりの桔梗の花の紫ぞ濃き／ひねもすをよく働きしその夜はうれしきことが待つ
 がに楽し／より多く仕事の出来し嬉しきは心清しく床のべにけり／^{こころ}快よく音をたてゝミシ
 ン機の仕事はかどり今日の嬉しさ」。

「編集子染太郎」による「短歌会会員諸氏へ」——「職員諸先生方の楓短歌会は近頃非
 常に盛んな模様であります。園内短歌会の会員諸氏もこの機会に起上つて短歌欄に躍動し
 た歌心を寄せて下さい。／特に男女青年層の投稿並び活動を期待してゐます。／カナリヤ

さえ歌を忘れるなんて古いお洒落は御免下さい／歌を詠める心のゆとりは与えられるものではなくて、つとめて自らはぐくむものだと思います」との伝言。

そのつぎのページには、染太郎の手になるとおもわれる5筆の1つ書きはすべて「涙」について。ハート模様のなかに「涙」と記された挿絵。「☆落漠たる人生も涙の靄を透して見る時は美しい世界を展開する。／☆涙は水ではない、心の幹をしぼった樹脂である」など。

上林龍の「秋季公演 みたま」は劇評。まず評仕方が示される——「春季公演劇評を書いたので、今度も書かうか、書くまいかといろいろ迷った揚句、とにかく書いてみることにした。こうしたことは其の時の自分の気持が一定の角度から見てみたのでは書くことの出来ないもので、劇からうける感激とか感傷に溺れては範囲の小さいものになって了ふ。そうなるといきほい冷静にならなければいけないし、私のやうな激し易い性質のものには困難なことなのである。だから私は平々凡々と一観客となつて劇評といふものではなく、見たまゝ感じたまゝを書いてみたのである」。

演目は、「結婚十五分前」「涙」「天理大和歌」「走馬灯」。1つめには「喜劇は観客が笑えさえすればよいものではなく、台詞を軽々しく云つてゐてもよいものではない。ユーモアの中の真実味が大切である」と、2つめには春季公演同様に「俳優の化粧法」を突き、「二場の病院の場は人形劇に等しい、それは化粧によつて死面をしてゐるからだ」と、これまた厳しい評ながらも、全体には、「春季公演より少い人数で一日公演だつた故か総じて良かった。然し今後考ふべきことは、何時でも観客は正しく見てゐるといふことである、劇団員は決してこのことを忘れてはならないし、亦それを忘れては向上も発展をも望むことは出来ないであらう」と誉めるところもあつたようだ。

最後に染太郎による「劇団さん江」——「◎演出者は俳優個別の演技監督に腐心するより先づ劇としての全体的な効果に苦心して戴き度い。／◎俳優諸君は化粧の白塗を喜ぶ、しかし白塗役者とは芸足らずな虚果役者の比喩であると言ふことを覚えてゐて戴きたい」と寸鉄を刺した。いや、酷評をうけての緩和か。

山田光子の「琴（思ひ出づるまゝに）」は、降る雨に、幼いころの雨の一日を思いだす。

それは母が弾く琴の音とともに甦る「懐しい思出の一齣」だった。彼女は記す――

療養所に住む様になつてからどうしてか私は追憶を辿る日が多い。思出は過去のものである。追憶にばかり耽ることはいけないことだと思ふけれど。でも私達の生活には楽しい希望がない。明日の生活に麗しい夢をえがく事が出来ない。／嘗つて私にも美しい七色の虹にも似た憧憬があつた。たとえそれはどんなことで覆へされようともそれを踏み越え、又新しい未来を夢みることが出来た。けれど病を宣告されてからの私はもう夢をもつことが出来なくなつて了つた。健康な人からはそれには又いろいろの説も出よう。病者と云へど何かの希望を持つことが出来ると。けれどそれは何と儂いものであらう。此の世のあらゆる生物は永遠のいのちの中に生きてゐる。／細胞は細胞を生む。〔中略〕だが私達病的存在は既に此の世に生存価値を失つたものでしかない。生きてはゐるが何と哀しい存在であらう。精神のみは恒に新しく息づいてはゐながら肉体はそれに伴つて行く事が出来ない。日に日に感覚を失つて行く苦痛に心の神経も麻痺してゆくかに思はれる。／一瞬々々の悦楽に哄笑に、私達は毎日を過してゆくより外に途がない。琴の音から思ひはくさぐさに移つてゆく。ふと気附けば外はまだ雨が降り続いてゐる。／むせぶかのような雨の音が。……

――追憶がわが身を苛む。精神と肉体が分離してしまい、そのからだわがこころを傷つけるというかのようだ。「でも」「けれども」といった逆接の接続詞の多用が、定まるところのないこころのありようを示していよう。

ところで、このあたりのページノズブルがずれている。39のつぎは当然40となるはずなのだが、それが50になってしまい、10ずれたノズブルが51のところであるべき数になおる(60のつぎが51となっている)。

龍子による「消息 卯之花会員諸君へ」は冒頭、「文芸会が出来てから卯之花会の動きが低くなつたやうに感じてゐるのは私のみではないやうに思ふ」とある。文芸会とは、『楓』誌の奥付にみえるとおりの、その発行を担う団体で、それとはべつにある卯之花会の活動が低調になっていることを憂えている。「卯之花会といふのは元々俳句の道に精進しようと努力する人ばかりの集りではなく懸賞募集に一句でも投稿した人をも包蔵してゐるのであつ

て、その会員も大幅に拡げられるだけ拡げてみて出入も自由である。こうした漠然たる組織の中から盛り上げるものを希むことは難しいことだ思ふ。それを文芸会の俳句部に繰入れてあるのだから今更新しい動きといふものを希むことは根本からして無理である」と、不活発なようすを致し方ないとみてもいる。

ついで、「その点卯之花同人会は、はつきりと性格があり、精進しようとする者の集りであるから今後は何とか努力して昔日の卯之花俳壇に盛り返したいと念願してある」というと、「卯之花会」と「卯之花同人会」は別組織なのか。「卯之花会の方は新人の出入もあるので文芸会の俳句部に合流して現在放送器の関係上やめて了つてゐる週間俳句を復活し卯之花同人会への道程としたいと其の係へ交渉してゐる」というのだから、やはりべつの団体であつて、前者から後者への進化発展をはかろうとしているようだ。

『楓』誌の印刷もみとおしながら、その暁に登場するであろう「雑詠欄」への寄稿を目指して「同人会」の活況を願う消息欄となつた。

「千島染太郎記録」と記された「ひなどり俳壇／雑詠」——山田美代子 5 句（「ほのぼのと抱けば温し菊の鉢」など）、本田幸雄 3 句（「残菊の庭に留守居をさびしかり」など）、津島久雄 3 句（「秋の日の斜めに写真とる庭に」など）、河山慶子 2 句（「松の間に朝の光や鴉の声」など）、立木民雄 2 句（「掃きなれし箒は親し落葉掃く」など）、堤良蔵 1 句（「竹荷ひ通る桶屋や柳散る」）、そして千島染太郎 2 句（「庭の日の小さく舞へる木の実独楽」）。

「後記」の署名も染太郎。冒頭で「読書に思索に、私達に恵まれた時間は静かに優しく営まれてゆく」季節を楽しみ、喜ぶようすが記され、ついで、「☆今月は医局の岡田誠一郎氏から詩操の高い作品を戴き久しく生気を失てゐた楓詩謡欄の愁眉をひらくことを得ました」と、「詩 豊作」の筆者は医局員だつたとわかる。療養者になりかわつて詩作したようで、ちょっと、気味悪い。

☆それぞれ人間の持つ高い理想を迫ひながら、或ひは人間の合理的な利益の為なら兎に角勇敢であるべき筈の個人の意志が、まゝ病的な薄脱状態にあることの様に、何んらかの目的に依つて集団し組織された一般の意志も亦、個人が品性を陶冶しその意志を研磨する如く絶えず多角的に洗鍊されなければ原始的な稚態に立還る脆弱さと浮浪性をもつ

てゐる様に思へる。果して一般意志が不変であり不動であり、清純無垢なものであるか、否や？美濃田明氏の論文「一般意志に就いて」を読後、視角の違つた場所から様々な批判のあることと思ひます。

と、掲載稿への評。

☆狭い誌面を領する為にはもつと婦人側も進出して下さい。近頃婦人の投稿は珍らしくなりました。どうか奮発して此の様な面にも男女同権の幅を見せて下さい。

ということで、「山田光子氏の「琴」を一寸巻末に置いてみました」とのこと。

一年をふりかえって、

☆駆ることが出来なかつたら歩いても、歩けなければ這ふてでも、一尺前に出れば一尺の進歩です。毎月の原稿難と編集プランの蹉跌に苦しみ乍らもやつと一年を経ました。未だミルク臭いところが反つて魅力になるかも知れませんが、私達の貧しき仕事に尚一會の御協力を希ひます。／☆会員諸氏の豊かな情操と新しい知慧の実を撰ることに依つて、「楓」は直く健かに育つてゆくことと信じてゐます。

と閉じられた。

「後記」ページの余白に、「或る人の問に答へて 文芸会便り (一)」と題のついた数行がくわわる——「☆文芸会とは詩謡会（文章会）短歌会・俳句会の三つ会を綜合した呼称であります。随つて各会の会員は即ち文芸会々員であります。「楓」の編輯は各会の幹部（世話人）に依つて務めてゐます。編輯會議は同時に文芸会の幹部会ともなり会の運営を司ります」との記載によって、文芸会の組織運営の一端がわかつた。

奥付にはまた募集広告はなく、やはり題字とおなじ書体の「楓」1文字のしたに、「園内綜合雑誌」の文字がみえ、ついで、「第一卷第六号／昭和二十二年十二月五日発行／編集者 楓編集部／発行者 文芸会」。

『楓』第1卷第6号、1947年12月5日発行、65ページ（目次、奥付にはノンブルなし）。

第2巻第1号 題字「楓」の1文字、「新年号」と横書き、浮びあがる「1948」の数字、大きく懐中時計の表紙絵がある号。

表紙見返しに「園内綜合雑誌楓新年号廻覧順」が再登場——山本実、高崎淳、美濃田、

永井静夫、竹村栄一、深山、浅野日出夫、山川清、植田、橋本春月、橋本秋暁子、原よし志、山田、寺西、山野うしほ、土肥、鈴木、中村、松本、山川、日花、浅田湖月、松村弘茂、村田義人、津島久夫、少年室、少女室、瀬川秀郎、飯崎、神路、金地、千島戻り。

扉には、「園内 楓 雑誌／第二卷第八号」と記されたうえで、号数の「八」が「一」に書き換えられている。前号の号数を継ぐのであれば「七」となるはずで、これでは二重に間違ったこととなる。挿絵は正月飾りのあれこれ。

目次は、まず、「表紙及びカット 千島染太郎」、「巻頭言」、「新春文芸入選作品発表」、村田義人「文章 再建日本に於ける吾等の立場」、瀬田洋・千島染太郎「詩謡 この道・歌留多の詩」、「短歌 新年雑詠」、「俳句 新年雑詠」、小野貞子・横道清子「少年少女文芸文章」、岡田誠太郎「詩 松」（「特別寄稿」との附記）、「後記」。

この号でまた原稿用紙の使用にもどる。以前とおなじ 1 ページ 200 字詰めの罫目が印刷されているが、欄外の印字は「10×20」のみとなった。

「巻頭言」の署名は「村田」。「癩と云ふ不可抗的なものと、終生たゞかふを余儀なくされてゐる、吾々のこの肉体や精神と云ふ複雑なものについて、吾々はどこまで真実に知り得てゐるであらう」と問い、「自己を知らずしてお互ひ個人の高まる筈はなく、個人々々が高まらずしてどうして吾々社会の民主化などあり得よう。それを無視し、忘却しての平和も文化も幸福も、畢竟空念仏に終つてしまふのだ。己れを探り、己れを知れ。自己への探究に鋭いメスをふるへ。それを新しきこの年の課題として、逞しき一步を踏み出さうではないか」との呼号だ。

前号に寄稿した医局員の岡田誠太郎が、今号にも「松」と題した詩を寄せている。

暈々と松の鱗^{にび}／鈍色に鱗光れば／そは／金属の味はひに似て／酸く渋き^お悪寒走れる／
漂泊^{きすら}へば冬の薄日に／流るゝは金属の哀傷／悲しくも悪^{さだめ}の運命よ／いつの世よりか悪の
その故／噛みしむれば奥歯の疼き／嘆けとて癒ゆるを知らず／滲み出づるは金属の汁液
／不吉なる夢にも似て／そが青白き味はひはまた／妖しがる^{イメージ}幻像に病み／腐骨^は食む犬の
爛れ^{たぶ}の／かの痂皮が花と墨々／狂人の口より吐ける／黄色の泡と臭へる／あはれあはれ
悲しき怒に／松の葉は鈍く尖れど／かの痂皮が花と墨々／思ほへばなほ徒に／金属の哀

傷流れ／悲しきは「在る」といふこと——

彼はこの新年号に「特別寄稿」までして、なにをあらわしたかったのだろう。正月といえ
ば松、とはいえても、その「松」をしてなにを詠おうとしたのか。

この稿の末尾余白には、「心の灯」と題して、菊池寛と石川啄木の言葉が転載されている。
前者が「最も普通な感情こそが最も多くの人々を動かすのである」、後者は「我は我によつ
て我の中に我を見る」。

「新春文芸入選作品」は「神宮園長選」によった。「一等 再建日本に於ける吾等の立場」
は村田義人の執筆。18 ページの大作。村田は、ときの総理大臣片山哲の「国民各自の自主
的な耐乏と勤勉」との標語に「矛盾」をみる。「乏しきに耐へてよく働けと云ふのである。
充分体の栄養を摂り、身ごしらへもがつちりとし、休息をとる設備も完備してみてこそよ
く働けるものである。それが空腹も辛棒し、体には粗末なものを纏ひ、充分疲労が癒され
なくても、我慢して一生懸命働いてくれ、と云ふのだから、これは明に矛盾してゐる。も
とも無理な注文であるのだ」というわけだ。この「解決」が課題となる。

第 1 に「吾々は敗戦国民であると云ふこと」をしっかりと知ること。そうして「種々の
不自由や不便も、一応当然なこととして従容とそれを受け取るだけの心構へを、各々がも
つべきではあるまいか」。

第 2 に自分たちの「境遇」を考えよという。「吾々はかうしたところに隔離されてゐるが
為に祖国再建と言ふことについても何一つ積極的な活動の出来ない者である」という立場
を自覚するがゆえに、「せめて吾々病者だけでも不自由のない生活をと云ふことは、〔中略〕
社会一般の窮乏はむしろ進んで甘受すると云ふところまで考へる必要がある」と。ただし、
「これは吾々は生産不能な癩者だから、卑屈になれと言ふのでも、さうした自分を省みて、
卑下せよと言ふのでもない。己れを識り己の分をわきまへて、謙譲の美德を養ふと言ふの
だ。権利を主張することだけ識つて、義務を怠る如き人間」ではいけないという。

だが、「だからと云つて、吾々はどんな不自由も窮乏も、文句なしにこれを忍ぼうと言ふ
のでは、断じてない。吾々と云へ共、宇宙的存在であり、独立した一個の人格を有する人
間であるのだ」から、「我國民一般的な生活水準が、もし吾々の中に保たれてゐないとした

ら、それは当然要求すべきであり、その要求は当然また満たさるべきである」と唱えることを忘れない。この「一般福祉の増進」を「吾々の内部で、吾々自身の手によつて、それが少しでも可能であるとしたら、それは真に合理的であり、結構なことゝ云はねばならぬ」というとき、ここで「勤勉と云ふことが問題となつて来る」。「吾々はこゝに療養に来てゐる者〔中略〕断じて働きにこゝへ来たのではないのだ」から、勤勉とはどうにも「吾々に似附かない」ことだというのだ。

「吾々が勤勉なんてことを考へるのは本末転倒と云ふより、むしろ滑稽と云つた感じさへする」とまでいいながらも、しかし、「これは吾々を、広い意味の病者と云ふ範疇に入れて考へる時のことで、“癩” そのものゝ特殊性を識り、そこに立脚して考へるときこの勤勉と云ふことも左程似附かないものでも、滑稽珍妙なことでもなくなつて来る」と転じる。

この病気の療養には、労働は絶対に禁物と云ふことはない。むしろ無聊な日々を送るより、働ける者に適度な労働は、反つて療養の助けとなる。それは医学的にも証明出来るであらうし、吾々お互いに体験して来てゐるところでもある。この働ける者が無理のない程度に働くと云ふ労働力を利用して、吾々の一般福祉の増進に役立たせ、幾分でも耐乏と云ふ重苦しいものを、の続と云ふことは出来ないものであらうか。

との提案が示されたのだった。

ここで想定される「異論」は、「かつて吾々はさうして来たし、現在もまたそれを行つてゐる。しかもそれにそれに依つて、吾々の生活がどれ程豊になり向上し得たと云ふのか」というもの。これに対しては、過去、現在のそうしたわれわれの労働が「果して全的に吾々自身の福祉のためにのみ、集中され、使用されて来たであらうか」とつめ寄る。

こうした議論のなかで、「吾々の労働力」は「一般社会人のそれよりも遥に貴重なもの」と価値づけられる。それを「園当局の外部への見栄や、空しい宣伝の具に供する如きは、実に愚の骨頂であり、吾々の労働力をさうした方面に利用せんとする者は、人道に悖る大なる罪惡を犯すことになるのだ」と断罪する。また、「それを単に利己のためにのみ使用することは、一般福祉の増進を目的とする、民主々義の精神に反することゝなるのだ」と手厳しい批判をする。したがって、「吾々は長い過去を通じて行はれて来た、この様な罪惡を

徹底的に追究するとともに、その様な愚さと蒙昧から脱し、いまこそその労働力の一切を挙げて吾々自身のために使用すべきである」との宣言となったのだった。

もう1つ想定される「異論」は、これが「またいつか吾々の労働力」の不当な利用となる禍根となるのではないか、ということ。したがって、「飽迄療養の本旨に則り、療養一本建で進むべきである」となる。そして、そうすることで「吾々の生活水準が低くなる様なことがあつても、それは吾々をこゝに収容隔離した政府の責任であり吾々はその責任を政府に追究し、待遇の改善を要求すべきである」との指針が展望されるのである。

こうした革新性の高い要求がどれくらい現実に議論されたり提起されたりしていたか、いまこの『楓』の誌面からはわからない。執筆者の村田は、そうした要求に現実味を認めていなかったのだろう。彼は「吾々はこゝでもまた敗戦国民であり、吾々の生活を保証するものもまた、敗戦国の政府であることをよく考へておく必要がある」と唱えた。「吾々だけがいま直にその様な生活を要求し、その権利だけをやたらに主張することが、果して現実に即した正しい生き方と云へるであらうか」ということだ。無理な要求をするよりも、「自分の知恵と能力を働かして」まずは改善をはかり、「更に時機を見計つて、それらのものを新なものにしてくれんことを要求する方が、遥かに暮しよい、現実に即した吾々の生き方ではあるまいか」と説くのだった。彼が述べた「耐乏」と「勤勉」とのあいだにある「矛盾」を「最少限」にし、また「それが再建日本に於ける吾々の立場ではあるまいか」と、彼はいうなれば、療養所の戦後をそう生きようと呼びかけたのである。

最後に彼は、「吾々と園当局との間柄」について述べる——「終戦後全国各地に勃興した労働運動、労働攻勢の影響をうけ、吾々療園にもそれに類した事柄が起きつゝある」が、「吾々と園当局の間柄は、一般労資の間柄とは、自ら別箇のものであると云ふこと」で、「労使の間柄は階級的、経済的利害関係が、その中核を為してゐるのに対し、吾々と当局の間には“救癩”と云ふヒューマニズムに立脚した精神がその根柢を為してゐること」だから、「飽く迄救癩の精神に則つて慎重に行動すべきである」と注意をうながし、したがって「園長を中心とした園の一体化を計ることこそ、また再建日本に於ける吾々の立場でもあらう」と稿を結ぶのだった。末尾に記された年月日は、「一九四八、一、八」。

日本国憲法のもと、園内融和が療養者によって説かれ、そうして遂げられる「園の一体化」が「再建日本」につながるとの方向が示されたのだった。なるほど、園長選による一等の入選作品にふさわしい内容であり、「巻頭言」の冒頭に引用された「敵を知り己れを知らば百戦詭ふからず」という孫子の兵法をめぐる、村田にとっての活用法もまた、よくわかるというものだ。

瀬田洋はこの号にも「詩 この道」を寄せた。

この道を／今日もまた／ひとり歩むか。／灰色の雲、^{ユクテ}行方を覆ひ／枯々とした 木の立ち並ぶ。／たゞ一筋の／窄きこの道／あゝ……。／^{よそひ}盛装を凝らしゝ花々の姿よ。／駘蕩として漂ふ甘き香りよ。／蝶よ！！ 鳥よ！！。／光よ！！ 熱よ！！。／燃え盛るいのちの焰よ。／^{あこがれ}憧憬のすべては／空しくもだへて地に陥ち／死の陰の谷を渡りし風の／肅々として吹きしくこの道／この道は^{ほろび}滅亡の道か！！。／この道は^{とこしへ}永遠の生命へ続く道か！！。／^{しこ}癪やみて^こ療院に^{ととせ}十歳／うらぶれ果てゝ よろめく足を／踏み立て 踏み立て／今日もまた／この道を／ひとり歩むか。

——ここではもはや義足の語は用いられず、「この道を／ひとり歩むか」と、われが詠われる。

ついで、「岡田誠太郎選」となる「新春文芸作品」があげられる——千島染太郎の「詩 歌留多の詩^{ウタ}」。つぎのページには、やはり染太郎の「折鶴の唄」が載る。

「高橋俊一郎選」による「短歌入選作品／新年雑詠」は、大仏正人（「病むよりは病まぬ 家族の苦しみを／思ひ深まる元朝の朝」など）、伯々上葎人、山田法水、神路美津代、神村向一、永井静夫の作品が載る。「選後に」という評は、「以上十首選びました。新年といふ題にとらはれ過ぎたためか秀作はなくいさゝか心淋しいものを感じました」と。

つづいて「選者吟」として「下腿切断 四首」——「クランケは身動かざりきメス取りて 切断部位をはへりたりけり／切断刀静かに当てゝ一息に骨に到るまで筋肉を断つ／骨をひく鋸のきしみて手に重く額に汗のにじむを覚ゆ／コツヘルの響せわしく手術室の^{シヅマ}静寂の内

に響も入たりけり」。

布施黙禅選の「白入選作品／課題 新年雑詠」は、天位に千島染太郎「羽子板の押絵も妻

も色古りぬ」、地位に山川夢草「茶柱に占ふ幸や今朝の春」、人位は植田弦月「一眼に幸こふ命雑煮祝ふ」、佳作15句には、山川夢草、山野うしほ、山田法水、松本明星（「癩孤児の春着は赤きララの服」）、岡明、千島染太郎、秋田穂月、中川風子、長井、松村弘茂、牧岡みほ、山野うしほ、浅田湖月の句が選ばれた。

「〇係りよりものは付投稿者皆様へ」の告知——「〇ものは付入選作品は園内文芸放送にて発表致しました。誌上発表は都合に依り取止めに致しました。／今後またの募集文芸には多数の御投稿をお願い致してをきます」と染太郎から。

楓編集部選の「新春児童文芸入選作品」は、小野貞子（13歳）の「お正月」——「私はお正月にはお家にかへりたいと思つた事もありましたが、かうしてお友達と遊んでみるとその事も忘れてしまひました。〔中略〕ふと家のことを思ひ出して、ちよつと泣いてしまひました。けれどもすぐにまた友達とおもしろく遊ぶやうになりました」と記される子どもごころ。

もう1編、横道清子（15歳）の「ピンポン大会」——相手を思い、また勝ちを喜び、またともに遊ぶ。

署名は「M」とのみある「後記」——「◆新年号をお届けする。新年号がこんなに遅くれて全く申し訳けない。来月号からはいろいろな障碍を越へて遅れた分を取り戻したいと希つてゐる。御了承を願ふ。〔中略〕◆本誌をもつと広く多くの人を読める様にして欲しいとの声をしばしば耳にする。これは吾々も常に心掛けてゐるところであるが、なかなか意に委せない。しかし今年は、それについての方法をよく考へて御希望に添ひたいと希つてゐる。／◆当園に於いても近頃文芸に対する関心が次第に高まりつゝある様だ。園内文化向上と言ふ点から考へても、これは真に悦ばしいことであり、過去一年を通じての“楓”の地味な歩みも決して無意義でなかつたと考へるのは、早計であらうか。／◆ともあれ、病めるこのいのちの悔ひのない生き方を求めて、今年もまた奮闘して行かう。大方の皆様の真実な叫びを、この楓に盛り上げんことを念願する。（M）」。

「後記」執筆者がかわり、原稿筆記者もかわつたようだ。ペンの手が異なる。

そのつぎには、「誰れが死を想ふ」と題された「抄録」で、「〇絶望は死に至る病ひであ

る」など。

奥付は、「園内総合雑誌 楓（第二巻第八号）〔やはり「八」が「一」に修正〕／昭和二十三年一月三十日発行／編輯者 光明園文芸会編集部／発行者 光明園文芸会／清記 瀬田洋／千島染太郎／二部発行」。やはり清書者がかわり、くわえて、2部発行という大きな変化があった。2部発行となったこと、その理由については、どこにも記されていない。

『楓』第2巻第1号、1948年1月30日発行、46ページ（目次ページノンブルなし、奥付同あり）。

第2巻第2号 「楓」の題字、「2. 3月号」と「文芸雑誌」の表示のある号。挿絵はこけし2つ。

扉には、「園内 楓 雑誌／第二巻第九号／昭和二十三年三月二十五日発行」と左から右への横書き、「第九号」の「九」が「二」に修正。「S.TA」のサインがある挿絵は格子模様と草の葉。

欄外には、上部に「No」、下部に「(10×20)」と、前号とは印字が異なる原稿用紙を使用。

目次——村田義人「巻頭言」、木下吉雄「花を捧げる者より結実を見る者へ」、瀬川秀夫「新春文芸入選作品／再建日本に於ける吾等の立場」、「卯の花俳壇 雑詠 江田島龍二選」、「光明花壇 雑詠」、島蔭会員「詩二篇 もつれ蝶・妻によせて」、「後記」、そして「表紙及びカット 千島染太郎」。

「巻頭言」の署名は「村田」。ここでは「“相愛互助云々”なんて言葉」がとりあげられた。「かつては大なる憧憬と希望をもつて、吾々の上に高く掲げられたこの言葉も、いまでは余りにも古臭い、陳腐極まるものとなつてゐる」と退けられ、「全つたくうんざりする此頃である」とまでいわれてしまう。「戦前戦時を通じて、この言葉がどれ程吾々の中に生き、吾々の社会を支へて来たか」というときもあったが、それが、「吾々が飢餓線を彷徨した終戦前後に於いては、この言葉は弊履の如く葬られ、一顧だにする者はなかつた」ほどとなった。さらに、「時代は変り、吾々の中にも平和と希望が甦つて来た。かつては口の端だにしなかつた、相愛互助云々の辞が、再び吾々の間に登場し始めた」というのである。

この「言葉は、肉身を遠く離れて生涯を送る吾々が、かうした境遇の中に生き抜く為の切実な要求として、早くより吾々の中に取り上げられ、用ひられて来たものだ。而して今後と云へ共、吾々の社会が存続する限り、最も必要なものゝ一つであることに変わりはない。にも拘らず、それがいま尚吾々の中で良き実を結ばぬ丈でなく、かつての色彩も失つてしまつたのは、一つ体どうした理由か！！」——それはなぜか、と問い、「人間の改造なくして、社会の改革はあり得ない」のだから、「吾々各自の改造」をうったえて、「折角浮び上つて来たこの相愛互助もまた遂に空中樓閣に終つて了」はないようにしようという。

木下吉雄の「花を捧げる者より結実を見る者へ」は、かつて「慰問のお客さん」として長島に来たことのあるものが、「長島の住み人となるべく、妻を伴ひ、いさゝかの家財を携へて郷里に別れを告げた」と始まる。「島の官舎より又勤めの行き戻りに」というのだから、この人物はいわゆる役所のひとということだ。かつては、「病める人の床辺にその身を劬はり心を慰める為、一束の花を飾らんとする人であつた」が、いまは、「諸氏と共に暮し、諸氏と共に生を辿り、いのちを育てんとする者である。諸氏と共に、一個の均しき人間として、己が生命の実を結ばせんと希求し、努力する実践者でなければならない」との自覚をみせる。

筆者はこれを療養者にも押しつける——「諸兄は結実を待つ者でなければならない。花は何時しか凋み落ちて埋ずもれるであらう。然し結実はそこにすべての可能性を宿しつゝ自ら発展していく。仮令自らは腐朽しても、そこには新しい芽生えと次の世界への誕生が営まれてゐる」からなのだ。さらに、「島の棲み人、吾々の心の結実は何等かの形で表現されねばならぬ。かくして必然的に生み出されたもの、この「楓誌」であると私は思ふ」という。

「赴任してきたばかりの私」に、「本号の楓誌に巻頭言として載せたいから何か書いてくれとの御依頼」をしたのは、「千島教養部長」だったとのこと。役所のものによる「吾々」の呼号が療養者にむけて発せられた。

前号につづいてこの号には、園長選になる「新春文芸入選作品」の2等が掲載された。論題はまえにおなじ「再建日本に於ける吾等の立場」、筆者は瀬川秀夫、全6ページ。

いま「吾々は吾々の社会をも一応、或る角度から見直す必要がある」という。

元来療養所は入園者の病症の程度がそれぞれ異つてゐるところから、互助相愛の精神をもつて、我々の至上命令として、遵奉されてきたといふ影響を受けてか、敗戦後においても強悪な犯罪はもちろん、暴力的行為すら絶対に見られず、そして秩序も十分に保たれてゐるので、表面的には平穏な、互助相愛の精神が洗練された社会の如くに見へる。とひとまずはいう。しかし現実には、「伝統的精神たる互助相愛亦已に今日のものでなくなろうとしてゐる」。

そうしたいま、「青年」を「再建の中心」とすること、「宗教団体等による新しい博愛道徳」が実践されること、「女性解放問題もとりあげ」ること、「文化人による一般入園者の文化水準の向上」などが、「各自に与へられた再建への大きな課題である」と示してこの稿は終る。

さて、「雑詠（二、三月）龍二選」では、植田弦月 8 句（「椿落つ石に憩ひの足組みり」など）、浅田湖月 4 句（「春風や女ばかりの伝馬船」など）、山田法水 4 句（「嗅覚にのみ知る身なり沈丁花」など）、浅野日出男 3 句（「筆の穂をしめす春水さゝにこり」など）、橋本春月 3 句（「丸木橋渡る^{ソマ}柚の子春の水」など）、鈴木健子 3 句（「陽に包ふ土の温みや露の臺」など）、高崎あつし 3 句（「熱の^め瞼の重たく窓に椿落つ」など）。

江田島龍二の「選后感」——「落椿宿命に似たる紅持てり。揚雲雀命のつなのありどころ／こうした句に私は限らない愛着を覚えます、吾々は主観、技巧はつゝしまねばなりません、然し技巧でない技巧、作者の偽らない主観を真実の中に見ひ出すのではないでせうか／茶柱に夢また浮かぶ春の朝。うかびては泡による泡春の水／丸木橋渡る仙の子春の水。／春は矢張りほゝえましい。喜び、それは冬からの解放でもあらう。／初蝶やすがるはづみの岩根より。嗅覚にのみ知る身なり沈丁花。／現れし巖に涉りては石蓴かく。陽に包ふ土の温みや露の臺／こうした真実の美しは客観の美しさだと存じます」。

大仏正人の「短歌」は 5 首——「さきさきは憂ひかさなる病むわれに生きねばならぬ^{すべ}術はわかたず／ありし世の父のよはひをこへにけり病ひもつ身にかくあるものか／永らへて在り甲斐もなき身ぞあはれ癒ゆることなく世を去る我か／夜に入れは神経痛に耐へかねて生

きの身われの嘆きはつきず／身にあまる重き責任もちつゝも癒えぬ病ひよ宿しかりけり」
(末尾に「(評議員)との追記あり」)。

高崎あつし 3首、「妻眼を病みて」の題で2首(「会ひたがる母の笑顔を胸ぬちに深く納めて盲ひてゆくか」など)。

永井静夫 12首(「おかはにて人のするなる尿の音は病室の夜を深くなしつる」など)、「新薬施療の診察を受くる列にならびて」の題で4首(「この内のいくたりの人は新薬に癒へて帰^{かへ}りしプランを言ひをり」など)。

飯崎吐詩朗は8首(「病葉の散るかすかなる音をすら聞きとめむとす我が神経は」「ひたすらに疼く神経に関はれば慾徳もなく日々に疲るゝ」など)。

このページ余白に告知文——「詩謡と文章に興味をお持ちの方は園内島蔭倶楽部へ御入会下さい。毎月文芸座談会や研究会を開いて和睦してある吾等の詩魂の==です、入会申込みは山川清迄」と。ここだけペンの手は染太郎。あらたに島蔭倶楽部なるものを結成か。

つぎのページが、染太郎「祭りの夜が欲しい」という散文。鳥居と松の挿絵が秀逸。

島蔭会員原よしじによる「詩／もつれ蝶」の冒頭には、「癩者同志の友情は常の世の友情とは異つた心の動きがある」の1文。もつれる蝶になぞらえた「二人」とは、男女の愛情のあらわれか、同性(異性?)の友情の示すところか。おなじく島蔭会員寺沢繁三「妻によせて」は、故郷での妻との別れを詠う。

「後記」の署名は「山川」——「◆二、三月合併号を新編輯員(特二千島氏ノ援助大有り)の処女編輯として未熟乍らもこゝに皆様のお手元にお届けする。各位の必読を乞ふ／◆本誌がさゝやか乍らも斯く内容装典共に充実して来た事はこれ一重に前編輯員の努力の賜と読者諸氏と共に心から感謝を捧げる次第。／◆木下先生の(花を捧げる者より結実を見る者へ)この一篇は巻頭言として頂戴したのであるが、構成の都合上本欄に記載する事になつた。悪しからず御了承を乞ふ」——新人編輯員はいまだペンに慣れていないようす。字が硬い。

つぎのページには、「吉田絃次郎作感想集「山家日記」の中「露の臺」の一節」が転載。

奥付——「園内綜合雑誌／楓(第二巻第九号)〔「九」が「二」に訂正〕／昭和二十三年

三月二十五日発行／編輯者 光明園文芸会／編輯部／発行者 光明園文芸会／二部発行」。2部発行も定着か。しかしそのことは、どこにもふれられていない。

『楓』第2巻第2号、1948年3月25日発行、31ページ（目次、奥付ページノンプルなし）。

第2巻第3号 題字「楓」、「4月号」は横書き、「陽春特別号」は縦書きとなる号。提灯に神社札と桜の花びらの躍動感あふれる表紙絵。

表紙見返しに「楓四月号廻覧順」が復活——池辺登、寺沢繁三／上林 ==、村田良人、利志見、橋本、原よしじ、山田、寺西、山田一夫、上丸武夫、山川、中村、日花、橋本、土肥、橋本、藤本トシ、浅野重夫、山本実、竹村、深山、美濃田、永井、山下、植田一夫、橋本春月、浅田、千島、神路、飯崎、津島久夫、少年室、少女室、中村吉一、柳瀬信次、梶豊子、山田光子、山川戻り。

扉がすばらしく斬新——米国の自由の女神像、星条旗と日章旗を簡略化した挿絵、「S・T」の署名。「第二巻 楓 第三号／陽春四月号」。原稿用紙がまたかわった。

目次——岡田誠太郎「詩 春緑」、「合同慰霊祭追悼文芸 詩、短歌、俳句」、池部のぼる「長篇小説 胡蘆島」、「詩欄」として、瀬田洋「縄」、柳瀬逸美「夜曲」、山川紀代志「海が恋しい」、原よしじ「見舞」、「卯の花俳壇 雑詠」、津島久夫「創作 お月夜」、「短歌 雑詠」、宮古東峰「明朗コント かけ出し時代」、「島の灯」、「後記」、そして「雇 染太郎」、「表紙及ビカツト千島染太郎」。

岡田誠太郎「詩 春緑」は、「人肌の悲しき匂か」「狂ほへる大脳を見よ」「ぬめぬめと濡れし唇」「粘液の果なき嘆かひ」などくだんの調子。煽情趣味の覗き見にみえる。

その末尾余白に千島染太郎「^{かす}霞む心から」——「遠い峰の松より目の前の針一本が／大きく見へる。／国と国との争ひより個人と個人の／身近な喧嘩沙汰が気にかゝる。／人間はとかく甘く淋しく弱く／出来てゐる。／諸国の国情未だ穏かならぬ新／聞紙上のニュースを読みつゝ世界／漫歩の夢をみてゐる／遠峰の松をみてゐる様に」。

「合同慰霊祭追悼文芸」とは、どういう慰霊、追悼なのか明示がないままに、短歌会 3首（「ひたすらに遺骨の前にぬか伏して／永久の安けさ祈るはらから／楽土建設に捧げつく

せし一生かも／いしづえ君ら園は盛る／鬪病苦みごとにたへて拓きたる／御身らが道我も
生き抜かん)、卯の花会3句(「法要や花菜曇りの戸に侍り」など)、島蔭倶楽部詩1編(「彼
の岸の友達へ捧げる詩)を寄せた。彼岸の法要か。

稿末尾余白に、染太郎「すべては一步から」——「総て基本練習と言ふものは／厄介な
興のない根気の要る／ことだ、相当に忍耐とぶつか／つてみても、すぐ飽きが出る／飽き
ることに戦ふのは苦しい。／つい器用さを小細工ごころが／顔を出してくる、器用さが基
本／訓練の邪魔になつたりする／然し基本練習で得た／力は血となり肉となり魂となつて
ゐる。基本練習を省る日に」。

島蔭会員池部のぼるの「長篇 葫蘆島」は、34 ページの大作。冒頭に朝鮮半島を中心にお
いた地図があり、「コロ島(引揚港)」から「博多」まで点線が引かれている。葫蘆島とは
大陸からの引き揚げの拠点だった。稿の冒頭には副題であるかのように、「敗戦と同時に海
外同胞はどのような状態に置かれたか?」と記してある。これは第二次世界大戦後の引き
揚げを記した創作なのだろうが、療養所や療養者とのかかわりがわからない。引き揚げの
途上で乱暴された女性が、「悪鬼の黒き血をそゝがれた私は汚れ果てた女となりました。骨
の髄まで腐敗しつくし、清浄だつた皮膚にまで汚点は浸透してゐます。この汚点を取り去
らぬうちは陽子は帰れないのです。……〔以下「…」省略〕／葉子は清い身体となつてお
母さんに御目にかゝります」というくだりが、病との類似を推測させるということか。

島蔭倶楽部の瀬田ひろしの詩は「縄」と題された——

日毎、夜毎／私はたゞ一筋の／縄を繕^なふ／いたつきのあまりに長く／しゝむらはいつか
崩れて／憧憬のなべて夢と消え去り／胸底に残る細き火に／かそかなる希ひを繋ぎ／私
はなほも／一筋の縄を繕ふ。／あゝ……／宇宙の真理と人間の真実／神と人との固
き結合よ／いつか掌の皮は破れ裂け／どす黝^{くろ}き血はこの縄を染め／孤愁に噎ぶ苦き泪を
呑みつゝ／幾歳月／私はこの縄を繕ひつゞけしことよ。／この縄もまた遂に／私の夢
まぼろしの一つかの／……／この縄こそ／私のいのち／真実私を支へ得る縄
なり。／うらぶれ果てゝ／暗^{たつき}き生活の明け暮れに／汚血のいよいよ猖獗^{たげ}る今日この頃／
荒き呼吸に悶えつゝも／限りなき光を希望／尽きざる歓喜の唄を求めて／ひねもす私は

／たゞ一筋のこの縄を縫ふ。

——両脚切断と義足をめぐり思案を記してきた瀬田が、「縄を縫ふ」ことを見据えた論を詠った。命綱ということか。

島蔭倶楽部の柳瀬逸美「夜曲」は、「白いベツトに／やせた冷たい光がはふと」と始まり、同山川紀代志「海が恋しい」は、「私はまたこの渚に来て佇む」ところからの心情を開き、同原よしじ「見舞」は、「そつと／本当にそつと／扉の外え置去りにした筈の／春」を詠う。

俳句は、浅野日出男 5 句（「蛙鳴く孤独の性をかなしませず／散る花や心大きく闘病す」など）、植田弦月 5 句（判読難）。

「雑詠 弦月選」に、浅田湖月 7 句（「紙雛を折りて断種の夫婦かな」など）、日花ひとし 6 句（「田螺殻夢と刹那を踏みくらべ」など）、浅野日出男 5 句（判読難）、橋本秋暁子 5 句（「ねむたさを輪にかく蝶や葱坊主」など）、上丸武夫 4 句（「溪流のしぶきに濡れてつゝじ燃ゆ」など）、田中千鶴 4 句（「そこはかと来て摘む娘等や青き踏む」など）、山川夢草 4 句（判読難）、内田恵水 4 句（判読難）、山田一夫 3 句（「鋏先におぼろの月をかけ帰る」など）、鈴木健子 3 句（「びつこ引く娘の愛嬌や青き踏む」など）、竹下鹿の子 3 句（「気安さにより来し人と青き踏む」など）、橋本春月 2 句（「迷ひ癖つく杖先や春の風」など）、高崎あつし 2 句（判読難）。

植田弦月による「選后感」は、判読がむつかしい。

津島久夫「創作 お月見の夜」は 22 ページの長編。満洲から引き揚げた一家の信心をめぐり話。

「短歌 飯崎吐詩朗選」は、藤本トシ 4 首（「^ア暁け近くなれば一途に思ふこと／^{ツマ}育夫に衣着す視力あらしめ」「身のまはりかにつくひとの手を借らず／一日^{ヒトヒ}経ぬれば湧く喜びか」ほか）、高崎あつし 4 首（「雨戸繰れど島なほ明けず冷々と／霧流れある療院の窓／目さむれば窓一ぱいに日光りて／色のせてゆく桜愛しも／朝霧の流るゝ島の静けさに／舟のエンジン島にこだます」など）。

島蔭会員宮古東峰の「^{ユーモア}明朗コント／“かけ出し時代”」は 8 ページあまり。「新米記者」の、とある日。

「天野忠作より」と記された詩は「熱い茶」。4月の「陽はまるく あたたかに」になった日の「熱い一杯のお茶」。

「新制中学校開校に寄す」と題されたページに、池部のぼる「島の灯」（6ページ）と、山河紀代志「新制中学入学式に列＝て」（4ページ）が載る。

池部は「日増に衰へ行く肉体を嘆きつゝ、狭きこの島を吾々の社会として」と稿を始める。療養所という「社会」とは通例、その外をあらわす語のはずなのだが、この時期の『楓』誌上には、「この島を吾々の社会として」のように、自分たちの住む領分を「社会」の語でいいあらわす用例がみられる。「社会」観の変容か。

今回の園内での「新制中学」の発足にさいして、「よし肉体は崩れ朽るとも、精神の発展の無限を信じ、吾々のユートピヤ建設に邁進しようではないか」と、池部は呼びかけた。

最後に「教養部」の署名の文章がおかれた——「木下吉雄先生の御努力を戴いて、五月から恩賜会館を借り、教養文化講座を開講致します、希望の講義があればお知らせ下さい」とは、これは新制中学校とはべつなのか。

ついでまた、島蔭会員寺沢繁三の「新制中等学校開校式に臨みて」がある（4ページ）。開校式は1948年3月26日のこと。入学に年齢制限はないのか、「向学の志に燃へて此処に集ひ来たるもの老若男女、併せて六十四名」で、寺沢は「我々入学者も」と記している。「此の日中学一年生として集つたものは、文字通り、六十の手習ひからを想はせる老人組から壮年者が大部分を占め、女子の入学者も二十名もあつたのであるが、私は当日集つた人々を見て青年の人達の案外少ないのに驚いたのである」というのだから、まさに老若男女を問わず入学したのだった。

島蔭会員の神路美津世は「入学の朝」と題した稿を寄せた（2ページ）。「三十をすぎてもう一度入学すると云ふことが何だかおかしくもあり、若がへつた様にも思はれるのでした」と彼女はいう。

「山川記」の署名がある「後記」——「◆本号は各位の多数の御寄稿を戴き陽春特輯号として編輯致しました。来月号から謄写版刷に致す予定で居りますから、なほ一層の御寄稿を願つて置きます。／◆岡田誠太郎先生の力作詩春緑は巻頭詩として掲載致しました、

作者の春に悶える心情がこの一篇に伺うふことが出来ます、切角の御愛賞を乞ふ。／◆コロ島、お月見の夜は長篇であります但読者の興味をそゝるものとして期待してゐます。今後各作者の一層の努力と健筆を祈ります。／◆詩欄の大収穫に反し短歌欄の淋しさが目立ちます、世の歌人に対し文化光明園建設の為め活発なる御活躍を望みます。／◆今回より島の灯欄を特輯致しました、この欄も次号を追つて充実させたいと思ひます、一般諸氏の意見、感想、抱負をどしどしとお寄せ下さい。／◆この楓誌は職員患者の綜合雑誌でありますので先生方の作品が余りにも少いと何等か杖を取られた盲の様な気が致します、先生方の短歌会俳句会に特にお願い致します、多数の御寄稿を（山川記）一終一」。

手書き手づくりの最終号となつた本号は、じつに本文 113 ページの大増号となつた。長編 2 稿のおかげで、短歌欄はさびしいという。他方で新規の欄がつくられ、次号以降の充実が願われている。この『楓』は「職員患者の綜合雑誌」という。あらたに寄稿が呼びかけられた医師は、これまではべつということか。

最終ページに、「各文化、趣味の団体責任者案内」が載つた——「☆各館（教養文化方面直接担当職員）木下芝生／☆文芸会並びに楓編集部 桜四 山川清／☆島蔭クラブ（文章・詩会）〃 〃／☆短歌会 = 養 飯崎敏夫／☆俳句会（卯の花会）作務 橋本正樹／☆野球場会 = 四 横山彰夫／☆卓球クラブ 椿一 岩田鹿夫／☆光明劇団 虹一 永野清夫／☆音楽会（楽団光明） 岩田武／☆園内図書室 山三 小林義男／☆園内事ム所教養部 椿四 千島染太郎／御用が御座居ましたら右の方まで」。

奥付は、1 つの囲みのなかに「昭和二十三年四月二十五日発行／第二卷第三号四月号〔「四」が「三」と訂正〕／編輯者／光明園楓編集部／発行所／光明園文芸会」、べつな囲みに「園内文芸機関誌／陽春特別号^{かえで}楓」。

『楓』第 2 卷第 3 号、1948 年 4 月 25 日発行、113 ページ（目次、奥付ページノンブルなし）。